
東方鴉守伝

茨陸號

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方鴉守伝

【Nコード】

N0194W

【作者名】

茨陸號

【あらすじ】

これは、ある一人の青年の御話。全てを失ったはずの青年は、幻想の里へと迷い込む。そこで出会う人、妖怪、神、巫女、魔法使い。その出会いが、何をもたらすのか。一時の幸福か、永遠なる絶望か。戦いの足音は彼を離さず、呪いのようにその身を焼き続ける。願わくば、その心に、僅かばかりの安息が訪れんことを。

― 東方鴉守伝 ―

その刃、何を守り、何を斬る。

東方プロジェクトとタツノコのKARASとのクロスオーバー小説です。

ちなみに、KARASはアニメ版ではなく、オリジナルになります。初の投稿となりますが、優しく見守って下さい。感想もいただけると嬉しいです。

序章 ある、未来の御話

振るった刃が、雨を散らし、空を裂き、肉を絶ち、魂を粉碎する。本来ならば五尺を超える長大な日本刀であつたはずのそれは半ばからへし折れ、いかなる障害であらうと切り裂いてきた刀身の輝きは薄れ、傷つき、もはや刃物として機能するかすら怪しいほどの状態であつた。

対する剣は西洋の両刃剣を想わせる重厚な造りであり、対峙する日本刀の存在を全て否定するかのように輝き、猛り、全てを砕かんとその牙を剥き出しにする。

鏡映しのように正反対の動きは、正反対であるがゆえに淀みなくぶつかり、削り合い、弾き合い——お互いを、その魂を、その意思を。

その存在が、そこにいる、そこに在る理由そのものを粉碎せんとする。

豪雨、と呼んで差し支えのないその中において、牙を振うその二つの存在だけが、まるで濁流に抗う岩のように、運命に抗うように——忘れられないように。膨大な時の流れに取り残されないように、しがみついているようにも見えた。

二人が戦う舞台は、街——街で、あつた場所。

人が楽しみ、人が悲しみ、人が喜び、人が楽しみ、人が出会い、人が別れ——そして、生きて、死ぬ。そんな場所であつたはずのそこは。

命の息吹も——死の手招きすらも消失した、ただの——舞台。全てに置き去りにされぬように在つたはずのその二人も気付かぬうちに、全てから取り残されて、それ

でも気付かずに、ただただ哀れに踊る道化師達の、悲しくて、滑稽で——とても、空っぽで、優しい舞台だった。

振う右腕には、もう感覚がほとんどない。左腕は、戦いが始まって五分ほどで二の腕から断ち切られた。身体には対する剣が絡みついた跡が無数に刻まれ、左腕から流れ落ちる命の証である血液は、とうに致死量を超えている。

纏う群青に張り付くそれは、まるで、救いにすがりつこうとする足掻きのようで——その体が動きたびに。

腕が振るわれる度に。自分から何かが振り落とされていく錯覚すら覚える。

もう、どれだけこの殺し合いを続けているのか、覚えがない。なんで、こんなことを始めてしまったのかも、思い出せない。動きたびに、何かを失くしてしまっているのがわかっていて、それが、とつもなく大切なものだとかわかっていているのに。

なんで、こんなになっても、闘うことをやめないのだろう。

ぶつかり合う牙の重量なのか、それとも、使い手の疲弊からか。刀を所持する群青の影が吹き飛ばされ、地面にたたきつけられる。

叩きつけられることに関する痛みは、もはや伝わってこない。痛みがないのではなく——痛みを感じる感覚そのものが、麻痺しているのだ。だからこそ、緩慢な動きながらも、刀を支えに黒い影は再び立ち上がろうとしていた。

しかし、その動きは、まるで赤子のように拙く。

しかし、亡者の様に執念深く。

しかし、それでも。

何があっても折れることのない、強き意思が瀕死の体を突き動かす。

——立て——と。

対峙する赤黒い影が、それを見据えながら、信じられないものを見る声色で語りかける。

『どうして？ どうして、なんで、どうしたら、立てるの？』

その声を聞きながら、ようやく膝立ちになる。

『もう、貴方が立つ理由も、闘う理由も！ 守る理由も！ いきる理由さえ、ないじゃない！』

何処か別の世界の言葉のように響くそれに反応し、僅かに顔を上げる。

確かに、その通りなのだ。二人が戦うその舞台が、全てを物語っている。

『なんで！？ どうして！？ もう、“私たち”が存在する理由さえなくなろうとしているのに』

攻めているのは自分なのに。もう、彼は満身創痍で、左腕もなく。どうあがいても、消滅するしか道が残っていないのに——どうして。

どうして、恐怖を覚えて、後ずさっているのだろう。

すでに、心が敗北を受けて入れているのか。それとも、単純に、目の前の存在が恐ろしいのか。あるいは、戦うことそのものから、逃げ出したがっているのか。

分からない。分からない。分からないから——怖い。

『俺、だ、って……わからない、よ。なんで……たつ、んだろ……つな』

途切れ途切れの声。立ち上がる、ただそれだけの行為にすら、生命力のほとんどを使用してしまっているのではないかと思うほどに、

遅々としたものになってしまっている。

理由はすでに無くなっている。

ありとあらゆる理由もなくなり、そして、後数分と待たずして、自分の——いや、両方の存在が消えて失せることも、もう、決まり切っている。

どうやつても覆せない。

いない神に祈っても届かない。

最初は、こんなことになるなんて思いもしなかった。全てが思い通りにいくとか、諦めなければなんとかなるなんて、思ってもいなかった。

でも、足掻いていれば、足掻き続ければ、救いはなくとも——答えくらいは出るものだと思っていた。

『っ！！　なら、なんで！！』

誰かのために戦ってきたつもりだった。

救う為に戦ってきたつもりだった。

守るために戦ってきたつもりだった。

赦してもらう為に、戦ってきた、つもりだった、のに。

『——多分、俺は——俺は——』

最後の言葉が、なかなか出てこない。ちゃんと、それは自分の中にあるのに、形になっているのに、出したとたんに、薄っぺらくなくなってしまいそう。嘘になってしまいそう、とてつもなく、怖い。だから——その代わりに。そのすべてを、自分のすべてを刀に変えて——構える。

語るべき言葉など、どこにもなかった。

もう、言葉が何かをなすことなど出来ないところまで来てしまった。

けれど、一つだけわかることがある。

それを止めてしまうことだけは、してはいけないのだ。

人が、人であるために。

己が、己であるために。

だからこそ。

ただ、前を向き——その一步を、踏み出した。

その一步が、一体どこへとつながるのか——彼にも、彼女にも、分からなかった。

序章 ある、未来の御話（後書き）

はじめまして、茨陸號です。

今回、個人的に大好きな「K A R A S」と東方のクロスオーバーの小説を投稿させていただきました。

タグにもついていると思うのですが、このお話の鴉は残念ですが、原作の乙羽鴉ではありません。演出や設定など、とても大好き作品ですが、何分、乙羽の台詞があんまり多くないもので……補完して変な風にするよりは、オリジナルの鴉を出した方がいいかな？ と思います、オリジナルの鴉になりました。

実際、最終決戦の時には、様々な街の鴉達が集合していたので、恐らく、あの場にいない鴉もいたのではという妄想がじわじわとわきあがり。

えー、あまり長くしてもアレなので。

次の話から、ようやく東方のキャラクターを少しずつ出していく予定です。拙い文章ではありますが、楽しみにしていただけたら幸いです。

作り置きの話がいくつかあるので、次の投稿は日をあけずに行いたいと思います。

それでは。

第一話 鴉と向日葵

柔らかな風が頬をなでる。ざわめきが心地よい音となりて耳を癒す。豊かな草花の匂いが鼻腔をくすぐり、見目にも鮮やかな色彩が瞳すら支配する。

それらに手をかざし、伝わってくる心を感じ取り、満足そうに頷く。草花の言葉に手をかざすその存在を、女神、と呼んだとしても差し支えはないだろう。

深く、澄んで、目を奪うその綺麗な深緑の髪。

その全てを人ならざる頂上の存在によって造り上げられたかと思うほど整った顔立ちに、見るものの魂を奪い、陶醉させ、服従すらさせてしまいそうになるほどの紅を彩る瞳が花を見つめる。

胸元を押し上げる豊かなふくらみ、存在感と反比例するかのようにな可憐な指先、一部の無駄すらも考えられない程に整ったそのプロポーションは、女性特有のものではあるが、はたして、彼女が持つ空気が、纏うものが、ヒトのものであるとはとても思えなかった。

そう——ここには、彼女を理解し、彼女から理解される物しか存在しない。

人ならざる者が心を通わす者が、ヒトであるはずがない。だからこそ、彼女は“花”に愛される。そういう存在なのだ。

こうして愛でるのはいつものこと。そこに不満はない。しかし——それ以外が不満。いや、退屈だ。

「最近の異変は、一か月ほどまえだったかしら」
ここ最近、変化がない。いや、正確に言えば、変化を起こす者がいない。

退屈を嫌う者は山ほどいるだろうが——もしかしたら、自分以外の

ところでは、それなりに退屈を紛らわすことがあるのだろう。

「異変を起こしたい、というほどではないけれど……最近はある人間達もこないし。そろそろ、何か起こってもいいんじゃないかしら。私を満足させてくれるくらいいの。誰か、喧嘩でも売りに来ないかしら……虐めてあげるのに」

にたあり、と美しくも怪しく歪み始める口元を意識しながらも、再び花に語りかける。

「大丈夫よ。貴方達は私が守るわ。ふふ、自分たちが私を満足させていないのか、って？ 違うわ。これは——いくなれば、間食よ。貴方達との語らいをもう一度甘美なものにするために必要なの」
楽しそうに笑いながら、人里にでも姿を現して、慌てふためく人を眺めたうえで、あの妖獣でも虐めてみようかと、足の向きを変えようとした瞬間——何の前触れもなく、何かの爆発物で——いや、この世界であるのなら、個人が出せる最高密度の弾幕を人ではなく、地面へと放ったかのような轟音と爆風が一瞬にして全てから音を奪っていく。
咄嗟に力を解放し、その暴力的なまでの暴風から周囲の花を守る。爆風そのものはほんの一瞬で頬をなでる微風へと変わったが——

「誰かしら」

地の底はおろか、天にすら牙をつきたてそうなほどに殺意に満ちた声が周囲に響き渡る。その怒りの程がわかったのか、怯えるように周囲の花が風に揺れる。

「私の花畑に無粋を持ち込むのは」

あふれ出る力が、怒りが、この現象を引き起こした愚か者を許すなと伝えてくる。無論、それに逆らうつもりなど彼女の中には微塵もない。

「——おしおき、してあげるわ」

呟きと共に飛び上がり、音の震源となる場所へと向かう。

距離にして二百メートルほど飛んだ頃、ようやく音の中心と思われる場所が見えてきた。ぎりぎり、花畑からは外れていたものの、彼女からの距離の都合上、どうしても間に合わなかった一部の花が犠牲になり、一瞬、怒りに我を忘れそうになり、それを行った存在を見据えて――眉根をひそめた。

勿論、花を傷つけたことそのものを許すつもりなど微塵もないし、五体満足で生きながらえさせるつもりなどなかったが――まるで、クレーターのようになぐられた地面に、左腕を失って倒れる男の姿を見て、流石に何が起こったのかを考えてしまった。

風に巻きあがるスカートを抑えながら着地し、半径5メートルほどのクレーターの中心に仰向けで倒れる人間の傍に降り立ち、まじまじとその姿を見やる。

顔立ちは――恐らく、人里にいる年頃――20の前後の男性と同じくらいだろうか。背丈も――170の半ばから後半はあるだろう。人里の人間がきているような、布を重ねたものではなく、見たことのない洗練された服の隙間からのぞく身体には、鍛え抜かれた者だけが持つ特有の鋭さが見て取れた。

しかし。何があったのか、左腕は二の腕から先がなくなり、途切れ途切れに赤い血を噴き出している。見たことのない服装に身を包んでいるが、それも所々が破れ、その下の肉体も、まるで刃に切り裂かれたように幾重にも傷が彫り込まれ、筋肉の繊維は勿論、その下の白い骨や――一部には内臓すら見てとれるほどの重症であった。僅かに肺が上下していることから、最低限の生命活動はしているようだ、このままでは遠からず命を落としてしまうことは明白であった。

「――どうしたものかしら」

人と友好的な者ならばここで助ける、という選択肢が浮かぶのだろうが、彼女にそこまでする義理はない。むしろ、花畑に損害を与えたものとして、即刻殺してもかまわないのではあるが、かといって死にかけの人間を手には掛けるなど、彼女を彼女たらしめているプライドが許さない。

悩みながら更に視線をずらしていくと——その右手から五十センチほど離れたところに、長大な——黒塗りの鞘に包まれ、有り得ない程に死の気配を漂わせる日本刀が転がっていた。

確か、冥界に住む庭師がこの世界では少ない刀使いであり、長刀と脇差しの二刀を扱う剣士であったが、その庭師が扱っている長刀より、更に30 40?ほど長い。

この男の身長が170の半ばとすれば、恐らく140?ほどはあるだろうか。およそ、人が扱える長さとは思えない。左手がないとすれば、これだけの巨大な獲物を、まさか右腕一本で扱っていたというのか。

鰐元には幾重にも鎖が巻かれ、嚴重に封印がなされているようにも見え——僅かに興味を惹かれた彼女が、一つ、足を踏み出した瞬間——鰐元の、ある部分が解放され——その中に在る、“眼”が、彼女を捉えた。敵対する可能性のある、外敵を。

「——っ！」

刹那、気圧されたかのように僅かに身動きをしてしまう。何が、と考えるまでもなく、本能が理解する。アレは——あの刀は。いや、あの刀を持つあの男は。

自分にも匹敵する——あるいは凌駕しかねない“力”を持つものなのだと。

その“威嚇”もとれる波動を放ったことが最後の力となったのか、すぐに鰐元の“眼”は閉じてしまったが、心臓に刃を突き立てられ

たかのような感覚は消えなかった。

「——面白いじゃない。見た限り、外来人の様だけど——」

普通なら、間違いなく見捨てているだろう。限りなく可能性は低いが、運んだとしても人里の入口まであろう。しかし、これほどの重圧を放つ存在をこのまま野放しにしておくのは勿体がない。

「感謝しなさい。助けてあげるわ……けど、起きたら、きつちりと代償をもらうわよ」

退屈を紛らわせるにも、ちょうどいい。果報は寝て待て（寝てないが）と人里では言うらしいが、まさにその通りとなった（若干違う）。

人里へ持っていても、この怪我を治療できる存在などいないだろう。いるとすれば、ただ一人。迷いの竹林の中に在り、幻想の中に在りて永遠を持つ者が住まう場所。

元々医者でもあるし、何よりもあの月の頭脳ならば、不可能なこともないだろう。

もし、そこまで持たずにこのまま倒れてしまうならば、彼はその程度の男だった、ということになる。

肩に男を担ぎあげ、竹林へと向かう為に空へと舞い上がった。

第一話 鴉と向日葵（後書き）

二話目にして、ヒロイン候補その一登場……ッ！！

花、緑色の髪、赤い瞳とくれば、あの人しかいません。名前は出していませんが、ご理解いただけると思います。

彼女をヒロイン候補にした理由としては、やはり、その性格故なのか、ヒロインにした話があまりにも少ない。ならばどうする……ッ！！？ 何を言う。答えなど一つ……自分で作ればいいじゃないか！！というわけです。個人的に東方の中では3本の指に入るくらいに好きなキャラです。性格的にも、能力的にも。

ちなみに、此処から暫く彼女の出番はありません。あつ、やめて、石を投げないで。だって、話の構成上、すぐ出すのはむずかしいですも……あれ、何か寒気が……うわ、何をする！やめ……アッー！！！！

第二話 幻想の診療所

もしも。という言葉がある。

あの時、あの行動をしていなければもつとちゃんとした未来になつていたかもしれないという、後悔の意味をもつ時もある。

あの時、あの行動をしていたからこそ、今があるのだという、成功を肯定する意味でもつかわれることもある。

ならば——もしも、あの時。

自分が、あの刀を抜いてなければ——どんな未来が、どんな今があったのだろうか。

瞼を、日の光が焼く。眠りの底から——いや、寝ていたというよりは、途切れていた意識の湖から、強引に引き寄せようと、その力を強めていく。

身体はそれに反するかのようにまったく動こうとしない。疲労は勿論のこと、身体を動かす根本的なエネルギーが足りず、意識の覚醒に伴って反応こそするものの、かろうじて瞼を開くことができる程度だった。

突然の光に目がくらみ、徐々に、瞳が世界を認識していく。

真っ白な——真っ白な——真っ白な——真っ白な？

「……白」

白い。白いが……端に、肌色が見えている気がする。ついでに言えば、更に上にもふもふとした、なにやら柔らかそうなものが揺れている。

寝ぼけた頭では理解するのに時間がかかったが、とりあえず、そのふるふると揺れているものは、知識の中に在る限りでは——そう、

尻尾、と呼ばれるものだ。

そして、それを腰のあたりに生やしているのは——ようやく光に慣れた視界が確認したのは——間違はなく、人間（？）であった。

両手、両足はあるし、白いニーソックスと、鼠色を薄くしたミニスカートと、群青色のブレザー。腰まで伸びる美しい髪。後ろ姿だけではあるが、十分に美しい少女であることは理解できる。何より——

（——眼福。ふむ、白か——縞でもいい）

彼にとつては、起きぬけに素晴らしい光景を拝めたことで、何とも言えない至福の境地へと旅立とうとしていた。

それが災いしたのか、それとも、視線が粘つこすぎたのか。背を向けている少女が、ぶるり、と身を震わせ、きよろきよろと周囲を見回し始めた。

まずい、と本能的に危険を感じる。

何事もなかったかのように、眼を閉じて微動だにしないようにしてやりすごそうとするが——なぜか、足音が近づいてきている気がする。

すぐそばで止まっているような気がする。視線が、じつとこちらを見つめている気がする。だらだらと脂汗が流れ落ちているような気がする。

耐える。耐えるんだ。ここは——耐える時だ。

1分か、2分か——あるいは、もつとか。永遠ともいえる時間が流れ——沈黙に耐えかねて薄眼を開けたその先にまっていたのは、形容しがたいとげとげしい鈍器と。汚物を見るような冷たい眼で見下ろす、世にも不思議な、兎耳の少女の“トテモキレイ”な笑顔だった。

無論、ここで彼の意識はもう一度途切れることになる。

思いつき鈍器でぶつ叩かれたはずなのに、すぐに傷跡が見えなくなるほどの回復を見せた患者を見て、赤と青のツートンカラーの衣装を身につけている医師　八意　永琳は色んな意味で感心せざるを得なかった。

「半死半生で運び込まれて二日で回復したのもそうだけど……起きぬけにうどんげの下着を観察する余裕がある患者は始めてよ」

「いや、ほめていただく程のことでもございません」

「褒めてないわよ……はあ、それで、身体の具合は？」

呆れながらも、カルテらしきものを片手に、眼鏡をかけて問いかける様は、まさに女医！

そう、あの、全男子の80%は憧れをもっているであろう、女医そのもののものだ！！

背も高く、スタイルなんか、もうこれなんか、ぼおん！　きゅっ！　ぼん！　だし。ああ、もう、丁寧に丹念に個人治療してほしい！

「これはこれで、なかなか……」

「……ちよつとアツチに旅立って戻ってこれなくなる薬があるんだけれど、いるかしら？」

「ごめんなさい」

ゼロコンマ一秒で土下座した。

「脱線はいいから。いいかげん、真面目に答えてくれるかしら？」

土下座から立ち上がり、同時に身体の具合を確かめてみる。やや動きにくいのは、気を失う前のこと、そして、二日間まったく動いていなかったから、身体がまだ慣れていないだけだろう。若干の痛みはあるが、それも大きいものではなく、恐らく、完全に治療されれば気にならない程度までは収まるだろう。

頭がふらつくのは、単純に血液が足りないからだろうし、怪我の度合いを考えれば、完治まではまだそれなりの時間はかかるだろうが――。

「問題は、ないかな。痛みはあるにはあるけど、多分、治りかけのあれこれだろーし」

「運ばれてきたときは正直危なかったけれどね。あの風見幽香が人を助けたというのにも驚いたけれど……」

「風見幽香？」

「ああ、貴方を此処に運んできた妖怪よ。正直、彼女が人助けをするなんて……助ける、って言うてきた瞬間は、ちよっとしたハルマゲドンが発生したかと思ったわ」

「……ハルマゲドンってちよっとしない現象だと思う」

「まあ、それくらい驚いたということね。それで……聞きたいことがあるんじゃない？」

聞きたいこと……聞きたいこと……ある。それはもう、沢山ある。色々があるが――。

「あの兎耳の子の下着は誰の趣味ですか？」

「本人よ」

「なにいきなり脱線してるんですか――！！」

「ばじゃーん、と眼が覚めた時に下着を覗いてしまった兎耳の少女が突貫してきた。

手に持っているのは、けがをしていた時に着ていた服装。恐らく、けがの治療の時についでに脱がせて、洗っていたのだろう。ということ……。

「やだ！ 私の裸を見たのね！ 訴えてやる！」

「な、なに言ってるんですか！ 不可抗力です！ しょうがないです！ とうか、師匠だって見てるし、てゐだって見てるし！」

顔を真っ赤にしてガーンと吠える。兎耳ブレザー美少女がそんな顔しても、可愛いだけでちつとも怖くないが。

その様子を見た二人は顔を見合わせ——僅かに口元を歪めた。

「あら、医師たるもの、そんな程度で顔を赤らめることなんてないわ。一体全体何を見てたのかしらね？ 傷口じゃなくて……？」

「し、師匠？！ わ、わわわ、わたしはわわたしはあー！！」

「もう、お婿に行けないっ！ 大切なものを奪われてしまったわ…… どうしてくれようかしら！」

気持ち悪いシナを造って、よよよ、と泣き崩れる。

「な！？ 何を言ってるんですか！！ 私だってお嫁にいけない辱めを受けましたよ！ っていうか、目覚めて一番に人の下着をガン見するってどんな人ですか貴方は！！」

「俺かい？ 俺はただの流れ者……理想郷を目指す、流れ者さ……」

「その理想郷、私にも見せてくれるかしら？」

「ちちち、いけねえぜお嬢さん。その理想郷は、近くて、遠い……そう、蜃気楼のように」

「何でいきなり寸劇が始まってるんですか？！ っていうか、貴方はどんなキャラ付けをしてるんですか！？ もう収集しきれないので止めてください……っ！！」

マジ泣きになりかけていたので、流石にこれ以上はまずいかと、永琳と顔を合わせて中断を選択する。いじるのは楽しいが、それに反応しなくなったら何の意味もないのだ。

「いや、ごめん。つい」

「つい、じゃないですよ!!」

「ほら、問答は一度仕舞いにしましょう。お腹も減ってきているころでしょうし、怪我を直すのは最終的には自身の治癒力……それに必要なのは、食事と睡眠、でしょう? えっと……」

そこまで話して、まだ名前も知らないことに気付いた。というか、自己紹介すら完全にしていない。その空気を察したのか、右手でかりかりと頭をかいた後、愛想笑いではない——人懐っこい子供のような笑みを浮かべて、彼は右手を差し出した。

「——守人。大神 守人だ」

「そう。私は八意 永琳。こっちは鈴仙・優曇華院・イナバよ」

そうして握手をする二人であつたが、永林の女性らしい柔らかい手に対し——守人の手は、その笑顔からは想像もできない程に——傷だらけであつた。

服を着替え、寝ていた間に空いた腹に料理が次々と吸い込まれていく。

左腕が使えない為に右手のみではあるが、それでも器用に次々と料理を口に運んでいく。

「忘れ去られた者が行き着く終着点……幻想郷ね」

食事が運ばれてい来るまでにあらかたこの世界についてのことを聞かされていた。眼が覚めた時点で——というよりは、兎耳の少女がいた時点で、何となくではあるが、別世界ではなくとも、元いた場所ではないだろうと当たりはつけていたが、まさかそれがい世界で

あるとは思いつしなかつた。

「ここに来る人やモノがその理由だけで来るわけじゃないけれどね。純粹に神隠しに会うひともあれば、その人が持つ力で門のようなものを開けてしまつてくる場合もあるし……何らかの現象がこちらの世界のモノと反応してくる場合もあるし……」

「要するに、ケースバイケースつてわけか……」

となると、考えられるのは、記憶に残る、最後の一撃。あの時のエネルギーが空間に何らかの作用を起こしたと考えるのが妥当だが、ならば、なぜ自分だけがここに来たのだろう。ここに運んでくれた風見幽香という女性も、その他の人は見ていないといつていたらしいし……。

「ここに来た理由を探してもしよーがない。それで、帰る方法はあるのか？」

「大まかに分けて二つね。一つは——隙間妖怪に頼むこと」

聞き慣れない言葉。妖怪、という言葉自体には元の世界である程度なじみがあるが、隙間、という単語が着くと途端に胡散臭くなる。なぜだろう。

「八雲 紫というのだけれどね。『ありとあらゆる境界を操る程度の能力』を持つている妖怪よ。その力を使つて、こちらの世界と貴方の世界をつなげてもらうのだけれど……正直、お勧めはしないわ」
「どうして？」

「基本的に神出鬼没なのよあの妖怪。自分から追いかけても出てこない癖に、いらぬ時に出てきたりする。出てきたとして、お願いしても「はい、やります」と言つとは思えないわ。それに、どこに住んでいるのかも知らないし……知つてゐる人もいないわ」

何となくではあるが、口調が淒く嫌そうである。口にするのも——
というべきか、心底嫌っているというわけでもないようだ、苦手
としているように見える。

手段としては確実性が高いがようではあるが、見つける方法がなければそれに固執するのは得策とは言えない……となると。

「もう一つは？」

「この幻想郷に貼られている博麗大結界結界を管理している巫女……
博麗 霊夢に頼んで返してもらう方法ね。こっちの方が簡単よ。

元々彼女がそれを役目にしているのもあるし……異変が起こらない
限りはたいてい神社にいるから、見つけやすいし」

「最初から後者の方だけでよくない？」

「警告の意味も兼ねて、よ。八雲 紫に対しては貴方が持っている
警戒心を500倍くらいにして対応するのがちょうどいいと思うわ」
「うーわー、それはすごそうだ……覚えとく」

何となく、警戒しておいた方がよさそうだ。外見を聞いたなら、会話を
すればすにぐにわかるわ、と言われ、流石にそれはと突っ込んだら、
年齢に似合わない服を着ているわと言われた。よくわからないが、
それを長々と話していても仕方がないだろう。

「とにかく、元の世界に帰りたいのなら博麗神社を尋ねなさい。
今の時間からだと途中で日が暮れるだろうから、今日は泊まって、
身体を休めたほうが無難ね。まだ体力も完全じゃないでしょう？」

完全ではないが、長居をしても迷惑だろうし、何より、もし、あの
戦いの途中でこちらに来てしまったのならば、早く帰らなければな
らない。帰ったとしても、何が変わえられるというものでもないのか
もしれないが、それでも。

——それでも、全てを受け止めなければならないのだ。どんな結果になるうとも。

「途中に泊まる場所はないのか？」

「一応、人里があるけれど……」

「せっかくの申し出だけど、遠慮するよ。人里までの案内だけ頼めるか？」

医者としては、今動くことは本来ならば勧められない。あれだけの怪我を完全に治すには、それこそ何ヶ月という時間がかかるだろう。見た目以上に頑丈なようではあるが、完全に治さないうちに動けば、それだけ完治が遅くなる。

そんなことを繰り返していれば、いずれ傷は直り切らないままに身体の奥深くにダメージを与え続け、決定的な事を引き起こしかねない。

真正面から、視線をぶつける。咎める意味と、確認と、覚悟を問うものを。

帰ってきたのは——これまでの会話の柔らかさには到底合わない、ある種の芯を秘めている者の強き瞳。

（何を言っても、ダメ、ってことかしらね……はあ）

恐らく、自分に降りかかる全てを分かっているもなお、やらなければならないことがあるのだろう。他人の言葉や同情などでは曲げられないものが、彼の中に在るのだろう。

「じゃあ、勝手にしなさい……」と言いたところだけど、私も医者の端くれだからね。治っていない患者をほおっておくというのもプライドに関わるわ。だから、道中——貴方が元の世界に戻るまで、優曇華を同行させるわ。それならいいわよ」

「あの兎耳の子？」

「ええ。その手じゃ包帯を取り換えるのも苦勞するでしょうし、相
当な重症でない限りは何かあっても対応できるくらいには仕込んで
あるわ。人里に置き薬をしてあるから、その交換のついでで案内も
出来るし。どうかしら？」

確かに、今身体に巻かれている包帯を一人で取り換えるというのは
なかなか重労働になるだろうし、そもそも人里までの道のりもわか
らない。

正直なところ、これ以上世話になるというのも気が引ける話ではあ
るが、もとより知らない土地を一人で歩くというのは危険極まりな
い。体力的には人並み以上にあるといっても、限度はある。

何より、これを承諾しない限りはこの家を出ることはできなさそう
だ。ある人が言っていた。医者と母親には逆らうな、と。

「りょーかい。従うよ。知らない土地で一人歩きするほど馬鹿じゃ
ないし」

「あら、よかったわ。もし従ってくれないと、新開発したこの薬を
使おうかな、って考えていたから」

いつの間にか右手に持っていた注射器から、紫色で、どろつとして、
何とも言えないとてつもない邪気を放つ液体が漏れだしていた。気
のせいかな、それがかかった食器が溶けている気がする。

どうやら、知らずのうちに三途の川の手前まで来ていたらしかった。
流れ落ちる冷や汗をぬぐいながら、立ち上がろうと、すぐそばに置
いていた長大な日本刀をつかもうとして——何か別の、柔らかい、
ひらひらしたものをつかんだ。

それをそのまま視線の位置まで上げてみると――。

下着。上と下で言ったら下の。黒。ガーター。色っぽい。

以上、説明終了である。世の中の紳士の方々ならば、これだけで何
の説明かよくわかってくれるだろう。

無言で、対面にいる大人の女性に視線で問いかける。

『これは貴女のですか？』

『いいえ、違います』

アイコンタクト終了。

「ふむ……実に……スバラシイ！」

「何が素晴らしいんですかあああああああああ！？」

呟いた彼に突き刺さったのは、勢いと体重の乗った——プロレスラ
ー張りのドロップキックだった。ちなみに、視線を声に向けた際に、
起きた時と同じ色の下着が見えてしまったことは、秘密にしておこ
うと——同時に、しっかりと心の中に焼きつけました。

なお、とあるウサ耳詐欺兎に隠された刀を巡って、急増コンビによ
る獣狩りが数十分にわたって繰り広げられたのは、勿論余談である。

第二話 幻想の診療所（後書き）

ふつかあーっ!!

ふう、危なかった……後少し回復魔法が遅れていたらやばかったぜ……と。

お久しぶり、というほどではありませんが、茨陸號です。

さて、第三話となりました。話数でいえば二話ですが……怪我の治療と言えば幻想鏡なら永遠亭。ということで、永遠亭で目覚めました主人公。この話でようやく出てきました名前。

内臓が見えてて助かるの？ という疑問は、永琳さんには無意味でしょう。幻想鏡のドクターですし。なんていうか、すごいことをしたんですよ、たぶん。

主人公のオリジナル鴉、守人さん登場。もうちよつと主人公の描写を入れたほうがいいかな？ 外見のイメージとしては、VERSUSという映画の主人公の兄貴を若くした感じ、かな？ 守人さんはパーマではないですが。あれ？ あの髪型ってパーマだったっけ……。

それはともかく、いいですよ、VERSUS。最近のアクション映画にはない、トンデモナイレベルの格闘シーンとか。いずれ彼のプロフィールも公開していこうかなと思います。

ちなみに、永琳さんはヒロインではありません……ッ!! 全国に二千万人はいる永琳ファンみなさん、ごめんなさい!

いや、まあ、彼女は最初からそういうのからは外していましたが。色々理由はありますが、難しいんですよ。キャラ的にも、誰かに惚れるというのは考えにくいし、頭が痛いので（いい意味で）、絡ませると凄まじい勢いで事件解決名探偵になっちゃいそう。

まあ、一番の理由は年齢です。なんていうか、ネットなどで調べた結果、億単位の年齢とかヒロインにしちゃちょっと（笑）……おや、部屋の扉を誰かが叩く音が……？

な、なにい！？　いきなり十字架の台に張り付けにされるダトウ！？
や、やめろシヨッ。ー！　ぶ、ぶつとばすぞおう！？
あ、や、止めてくださ、やめ、ぎゃーーーーーー！！

第三話 彷徨える者たち

ほああああ、という場違いな溜息をつきながら、竹の葉が敷き詰められた獣道を歩く。

竹そのものはなじみ深い、これほど深く、大きく、力強く、暗い竹林は初めてだ。永遠亭を出るときに『迷いの竹林』という名称であると聞いたが、なるほど、名前負けをしていない。これは、知らずに歩けば数分で迷ってしまうことは間違いないだろう。

だがしかし——やはり、懐かしい匂いがする。

子供の頃——ずっと幼い時の記憶ではあるが、こういう野山で遊んでいた記憶が僅かに残っている。何をやっていたかまでは覚えていないが、それでも、楽しかったことだけは確実に覚えている。

「こんだけの竹林なら、筍とかうまそうだな」

「それはもう。といっても、普通の人間がここに来ると間違いない迷うので、ここに住んでいる者だけの特権……でしょうか」

「筍ごはん、筑前煮、そのまま焼いてもいいし、煮物でもよし……」

「新鮮なやつなら生でもいけますしね。……あれ、ということは、貴方の出身は」

「日本だよ。っても……この外の日本かどうかはわからないけど」

「え？」

疑問の目を向けてきた鈴仙に曖昧な笑顔で誤魔化す。

三十分に及ぶ獣狩の上、取り返した長大な日本刀は背中に括られているものの、記憶が確かならば、武装としては心もとないし、何より——。

「あの……守人さん？」

「ん！？ あ、ああ、悪い。ちょっとボーっとしてた」

「あの、具合が悪いなら……」

「んにゃ、問題ないよ。とりあえず、さっさと人里に行こうか」

気になることはいくつもあるけれども、今の時点では何もできない。竹林を暫く歩いていると、開けた場所に今にも崩れそうな一軒家があった。形としては一軒家の体をなしてはいるものの、どうにもボロい。

柱は歪んでいるし、瓦はいくつもはがれている。壁にも穴があいているのを何かで強引に埋めた跡があるし、草は一部の場所を除いて生え放題だし……まるで、ダム建設のために打ち捨てられた農村の家と言えはいいのだろうか。

とはいっても、玄関までの道はきっちり確保されているし、視界の端に野菜を造っているとおぼしき場所が見えるので、一応人は住んでいるのだろう。

「ああ、ここはですね。えっと……姫様の喧嘩友達が住んでいる家です」

「喧嘩友達？」

「ええ。藤原妹紅っていう蓬萊人なんですけど……いつも姫様と殺し合いをするんですよ」

「……それって、喧嘩友達とは言わないじゃ？」

「あ、大丈夫ですよ。姫様も、此処に住んでる人も、不老不死ですから」

不老不死。人類が求めてやまない、ある意味で究極の命題。公にはなっていないだろうが、それを求めて研究している人間など山ほどいる。それが、こんなところで……。

いきなり出てきた単語に何とも言えない表情になりながらも、話を聞く。

「姫様の年齢はいくつなのかはわかりませんが、藤原妹紅も千年は生きているらしいですし。永く生きてると、どうにも退屈に敏感になるらしくて……本気で殺し合うんですけど、殺しきれないのがわかってるので、なんというか……暇つぶしになってるみたいですよ」

「酷くはた迷惑な暇つぶしだな、そりゃ……今は……いない？」

「みたいですね。まあ、別に用事があるわけでもないですし、先を急ぎましょうか」

竹林の隠れ家を後に、再び歩を進めていく。

つんと鼻をつく竹の匂いと、僅かに湿っている草の匂い。自然そのものの香りが気持ちいい。そんな中で、とても気になることがある。場所であれば二つある。

一つは——視線の先、鈴仙の頭の上でピコピコと揺れている二つの兎耳。そして、ブレザーミニスカートニーソックスという、どうしてもそのチョイスなんだ、と言わんばかりのその服装の中で、腰のあたりでふさふさと動いている……白い尻尾。

とても触ってみたい。どんな感触なのかを確かめてみたい。兎耳があるということは、通常の耳はないのだろうか。兎の妖怪ということではあるが……ならばなぜ人型なのか。

興味は尽きない。

ついでにあの下着についても興味が尽きない。

「……なにか変なこと考えませんでした？」

「いえ、まったく」

誤魔化すように鼻歌を歌いながら歩くその横顔を油断ならない瞳で眺めつつも、足は止めずに進んでいく。

幻想卿は全てを受け入れる。幻想卿には、忘れ去られた者が流れ着く最後の楽園だという。だとすれば、あの“妖”たちもこちらに流れ着いているのだろうか。

会いたい妖もいるし、出来れば会いたくない妖怪もいる。今の時点でもっとも会いたくないのは決まっているが。

迷いの竹林、と言うくらいだから相当に複雑なのかと思いきや——30分程度で出ることができた。どうやら、広さそのものとしてはそこまで極端に広いわけではなく、むしろ名前が持つ意味と先入観、そして同じ風景が続くことによる錯覚によって迷ってしまうのだという。迷路を抜けるには直線をさえぎるものを取り除けばいい、という理論(?)と同じである。下手に疑いを持たずに一直線にいけば、出るのは難しくない……出るのだけは、ということだ。

それでも迷ってしまうのは——人間故に、なのだそうだ。もし、ここに一人で来たとしたら、自分も迷っていたのだろうか、と背後に見える竹林を振り返る。

思えば——自発的に決断したことなど、何一つとしてなかったような気がする。

あいつがいなければ、今手に持っている刀を持つこともなかっただろう。

と言っても、たらればに意味はない。今、この手にこの刀を持って此処にいる。それがすべてなのだ。

竹林から視線を前に戻して歩き始めようとしたその時。視界に入ったモノを見て——思わず足をとめた。

視界に入っただといつても、その永い道の先の先。豆粒にしか見えな
いような距離にあるものだが——赤い何かと、色んな何かが見え
ているように見えるし——なにより、遠間でも伝わってくる——覚
えのある、気配。

「——」

「どうかしましたか……っと、あれは……炎……ということとは、藤
原 妹紅が弾幕ごっこでもやっているんでしょう。恐らく」

いや、違う。この気配は間違いようがない。自分がここにきたのだ
から、彼らもこちらに来ていておかしくはない。

本当に彼らだとしたら、終わらせるに相応しいのは——自分しかい
ない。身体の状態と武装からしてみれば、不安しかないが、それ
にげるわけにも、いかない。

考えた直後、言葉にするよりも早くに彼は駆けだしていた。虚を突
かれた鈴仙が反応を忘れてしまうほど、つい二日前まで半死半生だ
ったとは思えない程の速度で。

竹の間を駆け抜け、邪魔な木々は打ち払い、身体が発する痛みを全
て無視して——竹林の中に不自然に生まれた、まるで焼き払ったか
のような更地へと到達した。

そこにいたのは、二人と一匹。

曇り一つない、極上の黒髪を腰まで伸ばした、うっかりすれば、一
目で魂の根元まで持つて行かれそうなほどの絶世の美人
対照的に、色素の抜けた白髪を紅白の布で所々をまとめ、戦時中の
ような赤いもんぺとシャツを着込んだ——これも、美人。

二人ともが所々服を損傷し、その下に在る陶磁器のような白い肌に

傷跡が見て取れる。

そして、それと対峙している、おおそ生物とは思えない形状をした、まるで、二足歩行をするカエルのような姿をした、化物。

今の今まで戦闘が行われていたらしく、その緊迫した空気に突如として乱入してきた部外者に視線が集まる。突然向けられた視線に若干圧し込まれる物の、彼の視線は化物に固定されている。

「よう！ 河童！ お前もここにきてたのかよ。手紙くらいくれればこっちから会いに来てやったのに！」

身体の不調を誤魔化すかのように、敢えてテンションをあげてこの重い空気を吹き飛ばす。

「おい、おまえ、早く逃げろ！ お前みたいなやつがくるところじゃない！！」

「あら、優しいのね、妹紅。そうね、彼女に賛同するわけじゃないけれど、邪魔かしら。これ以上、私たちの生きがいの邪魔は増やしたくないわ」

「そういつてくれるなつて。何の因果か、そっちの腹でつぶりは顔見知りだね。ちょっと話をしたいんだよ。な、河童？」

改めて視線を腹でつぶりの化け物——河童に向ける。その視線を受け、機械と生物がヒュージョンしようとしてうっかり比率を間違えたかのような化物は、瞳をぎょろりと輝かせ、乱入してきた青年を睨みつける。

『何者だ貴様。我の名を知っているようだが、“同類”というわけでもない』

「おいおい。あんなに熱く愛し合った（殺し合った）ってのに、つれないな。ま、俺がのした奴なのか——別の同類がのした奴なのか

はわらないけど……これ見りゃ、腹に養分がいった頭でも理解できるだろ？」

背負っていた長刀を手に、その鰐元——今はあかないその力の証たる紋章が、日の元に照らされる。堅く閉ざされた黒き瞳、それを封じる牙の印。

——其れは、守護者の刃。

——其れは、畏怖の証。

——其れは、かつて己を刈り取った、死神の鎌

その刀を持つものを、彼の地の人々は畏怖と敬意を込めて。またある存在は憎しみと怒りをその言葉に乗せて、こう呼んだ。

『——貴様、鴉か——！』

第三話 彷徨える者たち（後書き）

はい、ちょっと間があきました。茨陸號です。

え？ 前回のあとがきはとうした？ 死んだんじゃないか？ はは、そんなことはなかった。うん、なかったんだ。なかったということにしてください（懇願）

か、改造なんかされてないんだからねっ！

間違っても、右手がドリルになったとかそういうことはないんだからねっ！

（ぎゅいいいんー！）

……さて、遭遇しました河童。原作でも最初のやられや……ごふごふ……敵役、河童。リスペクト、という形になるのかな？ 原作に おいても最初に出てきたので、やはり、この話でも最初に戦うのは 彼が適任かと思い、ご登場と相成りました。

舞台は、竹林。いつもの如くの姫様と焼き鳥。そこに割り込む乱入者二人。そして置いてけぼりの鈴仙。さて、これからどうなるのでしょうか。

KARASを知っている方は気付いているかもしれませんが、鴉に成るにはある条件があるのですが、なぜ守人が鴉となったのかも、後々説明されていきます。

楽しみにされている方が何人いるかわかりませんが、その時までお待ちください。

そして、付け加えるならまだ出てこないもう一人のヒロイン候補…

…！！

次の話も出てこないぞもう一人のヒロイン候補……！！

その次の話も出てこない可能性が高いもう一人のヒロイン候補……

！！

てへっ。ごめんねっ！

あれ？ なぜか覆いかぶさってくる影が……カーブを描く角みたい

なものが二つ……あれ？

あ……んごっふ！！

（堅いものが鈍器で碎かれる音が響いた）

第四話 その名は“鴉”

怒りと、憎しみと、恨みと——僅かな恐怖。

彼の名を口にする時、想起する時、伴って抱く感情はその四つ。彼にとっての大敵であり、彼にとっての、ある意味で救いともなったこともある、その名前。

「お、やっぱり、そこは忘れてないんだ。つーことは、あんたをのしたのは別の同類ってことか。ま、それはそれ——。なんでお前がここにいる？ どうやってきた？ そもそも、死んだはずだろ？ ちょーっと教えてくれない？ ほら、俺はお前とおんなじ状態みたいだし」

その口の軽さは、今まで出会ったことがある鴉とは、似ても似つかなかった。出会ったことがないだけかもしれないが、ここまで“軽い”雰囲気を漂わせている鴉は聞いたことがない。

『……貴様が我の立場ならば、素直に応えると思うか？』

「ま、そりゃそうか……。しゃーない。全人類超絶激烈博愛主義者の俺としては、荒事は好きじゃないんだけど……」

長大、としか言いようがない刀を軽々と振り回し、鞘に入れたまま、切っ先を河童に向ける。

「悪いが、バケモンは対象外だ！！」

『我をバケモノと呼ぶか！！ それを狩る貴様——いや、貴様等は何だというのだ！！！』

「へっ、決まってるだろ……正義のヒーローだよ!!」

大地を蹴り、疾走する。身体がかすむほどの速度で、瞬きほどの間に間合いを詰める。

それを牽制するかのようには河童の肩に装着されている筒から、視認できない程の速度で弾が――水を圧縮した水弾とも言えるものが立て続けに発射される。

進路の先にあるものは弾いて散らし、服に触れる程度の軌道に在るものは気にも留めず、ただただひたすらに間合いをつぶす。

記憶に在る河童と、どれほど違うのか。固体差というものは、単一種ならばどうしても出てきてしまうものであるが――幸い、と言うべきか、守人が倒したことのある同名の妖怪とほぼ同じ能力であるようだ。

そして、この場が水場でないことも幸いしている。元々、河童は水の中をその生息域としている種族。陸地で活動が出来ないわけではないが、ホームグラウンドと比べれば雲泥の差。

そこに加えて今まで戦っていた二人に喰らったダメージによる消耗により、目に見えて動きが鈍っていた。しかし、守人自身のダメージも含めて対比すれば、互角か少々守人有利と言う程度だった。

「ふ――」

大きく威力を増加させた水弾を回避し、駆け抜けざまに鞘に包まれたままの刀を全力で振りぬく。衝撃により僅かに河童の身体が浮いたものの、ダメージらしいダメージはない。

手に帰ってきた衝撃に顔をしかめながら、即座にバック宙でその頭上へと舞い上がり、叩きつけるような一撃を繰り出す。防御と攻撃

を兼ね備えた鉤爪の一撃が振り払うように宙へ浮く守人に叩きつけられるが、落下の勢いを利用した一撃により相殺される。

金属が擦れる耳障りな音を残しながら弾かれ、その反動すら利用して地面すれすれを疾走する。その強大さゆえに仇となる真下の空間、股下の僅かな隙間に身体をねじ込みながら強引に刀を振り、アキレス腱にあたる部分を撃つものの、多少揺らいだ程度。振るった後の僅かな硬直にねじ込まれる剛腕の一撃に地面がめくれあがるが、身体を捻って寸でのところで回避。

追撃に放たれる水弾を弾く体制ではなく、更に速度を上げて疾走することで着弾点をずらしてゆく。

左腕がないことでバランスが崩れているからこそ、立ち止まっただの戦いに持ち込もうとはしない。左腕による押し込みが出来ない分、それを加速で補う。無理に力勝負に持ち込まないことでその場にとどまらないことを可能とし、鞘による打撃で着実にダメージを与えていこうとするが――自身が想像していたよりも、明らかに体の動きが悪く、手に力も入らない。

専門家による治療によって動けるようになっていても、身体の内側に蓄積されているものは回復していかないらしく、持久戦に持ち込むこともできない。

つまり、相手が美少女二人と闘って消耗しているという事実があっても、明らかに分が悪い。先ほどから彼の攻撃の何一つとして有効打になりえていないのだ。

思うようにならない内心の焦燥を押し殺しながら、戦闘は続く。

終わる気配がなかなか見えない戦いを、戦闘区域の外から眺める少女が二人。

「……あいつ、強いな。私と同じで技術っていうよりは、場数で鍛えたみたいだ。速さも申し分ない、けど……ダメだ。あの武器じゃあ何発撃ち込んでも届かない」

白の少女は呟く。

「あの刀、“抜かない”のではなく“抜けない”のかしら？ 撃ちすぎる場所は急所ばかりだけど……妹紅の言うとおりね」

黒の少女がそれに重なる。

前者は明らかに怪しんでいる様子で、後者はそれに加えて自分たちの戦いに邪魔をした無粋を責める眼で。繰り広げられる戦いを見つめる。

相応の理由がない限り、他者の勝負——弾幕ごっこ、という形ではあるが、その勝負介入するというのは幻想郷においては少ない。しかし、この戦いにおいては、先に戦っていたのはこちらなのだ。

「素晴らしくはあるけれど、雅さはないわね。——ねえ、妹紅。やっぱりここは、新参者に幻想郷のルールと言うモノをその身を持つて知らせてあげべきだと思わない？」

「どっちに？」

二人の視界のなかには、未だに激しく交戦している一人と一匹が移っている。今までと変わらず、速度で優位に立つ守人が手数で圧倒しているように見えるものの、河童の攻撃速度は落ちておらず、しかも防御すらしていない。相手に自分を倒せるだけのモノがないと理解し始め、防御の分のリソースを攻撃に割り当て始めているのだ。

このままいけば、遠からずじり貧になることは目に見えていた。

「両方、と言いたところだけ——あの豚蛙は見るに堪えないわね。酷いダミ声だし、ぬるぬるしてるし、雅さどころか、品もないわ。それに比べて、あちらの男は——それなりにいい男じゃない？」

「ああいうのが趣味なのか。父様の求婚を断っておいて」

その言葉には答えず、黒の少女は口元を押さえて感情の見えない笑いを洩らすだけだった。白の少女も、そのあたりを今言うのはおかしいと思っているのか、突っ込んで聞かなかった。

「それに、全人類超絶激烈博愛主義なんて、素晴らしい主張をしているんだもの。彼に協力した方が、楽しそうじゃない？」

「——なるほど」

確かに——そのほうが面白そうだ。

後は、タイミングを計る。むやみに乱入しても面白くない。どうせなら、両方が驚いて狼狽するぐらいのタイミングでないと、面白くない——。

気取られぬように、ゆっくりと二人の少女は動きだす。

同時に、もう一人の乱入者がこの戦闘区域へと近づいてきていた。この戦いに終焉を呼び込むために。

そして、戦闘は最終局面へと移行する。

幾度目の交錯だろうか。お互いにままならない戦闘が続いたせいか、

間合いが一度大きく離れる。ギリギリのところで回避し続けている
せいか、気付かぬ内に頬を深くえぐられていた。溢れる血を袖で拭
い、刀を担いで河童に視線を向ける。

『何故“鴉”とならぬ。まさか、そのまま我を倒せると思うてか』

届く声には、若干の困惑と苛立ちが見て取れたが、その多くは自身
の攻撃が後一步のところで届かないことによるものだろう。

「いやいや、どうやら暫く寝てたらしくてね。ウォーミングアップ
ってやつだよ」

余裕のフリをしてそう嘯いてみるが、実際、あまり旗色は良くない。
精一杯の誤魔化しを試みたのだが……。

『……気付かぬと思うてか。その体、決して万全ではあるまい』

内心舌打ちをする。そうそううまくいかないとは思っていたが、存
外に早く見破られた。

見破られているとしたなら、尚更早期での決着を求めなければなら
ない。あちらも、必要以上に長引かせるつもりなど毛頭ないだろう。
これからは、文字通りの短期決着となる。

「言つてろ——っ！」

仕掛けようと動くその前、挑発の言葉を言い切る前に蹴った足元で
着弾する音と共に地面が抉られる。寸でのところで回避し、巻きあ
がる土くれを浴びながら、耳に残る音と気配だけを頼りに横っ飛び
をする。

空中を飛ぶようにして跳ね回る中、視界に入ったのは、身体が水で
形成された人型の化け物。足元にある水溜りから吸い上げるように

水弾を進路に放ってくる。

「ち——器用だな！」

恐らく、二人の少女と闘っていた時から、この周囲に水場がないことを悟り、ある程度のダメージを覚悟で水弾を放ち続け、水溜りをつくっていたのだろう。

水溜りであるがゆえにその維持は短時間だろうが、お互いに短期決着を目指しているのならば、十分すぎる。

その上、きつちりと包囲する形で配置されているのが憎らしい。長刀の尺の都合上、弾くにしても取り回しがしにくい。直線的に向かってきてくれるならともかく、今の状況では——。

焦りから、今までの戦闘で決られた地面に足を取られ、刹那の瞬間、体勢が崩される。狙ったかのように放たれる水弾に刀が弾かれ——手放さなかったものの体ごと引っ張られ、回避に僅かな遅れが出る。足元を水弾がえぐる。足がもつれ、狙い澄ました水弾が手から刀を弾く。

空に弧を描き吹き飛ぶ刀。視線を戻せば——目の前に、凶悪の一言では済まされない——その鉤爪が——。自分の命を刈り取る鉤爪が——何の躊躇いもなく、何の障害もなく——降り注ぐ、はずだった。

その刹那、河童が見たのは、自分の命が奪われる直前にもかかわらず不敵な笑みを浮かべる守人と——間に割り込む罪深き深紅の焰と——並び立つこの世のものとは思えない美貌。

そして——吹き飛んだはずの刀を掴む白い腕。

「ま——たく！ 怪我人がなにはりきってるんですか——！」

頭頂部に聳える獣の耳を苛立たしげに動かしながら——その指で、まるで子供の遊びのように拳銃の形を造り——しかし、指先に宿る力は子供だましでは済まされない。驚愕としか表現できない感情にとらわれた瞬間、腹部に、凄まじい熱量が直撃する。

「あれだけいい具合に焼かれて、まさか、私の焰の熱さを忘れたとはいわないわよね？」

罪科の白と、浄化の焰をその手に持つ少女が、不敵に微笑む。炸裂する焰は、“自身”を邪魔する全てを拒絶する。空間も、物質も、ただただ主の命に従い、翩り、蹂躪し、全てを灰にするまで猛ることをやめない——！

「突然割り込んできたこの男もそうだけど、私を前にして他に眼を移すなんて、無粋よ」

鈴を転がすような声と、眩いほどの樹の枝が振われると、色とりどりの弾が次々に河童を打ちすえる。

『又——ア——！』

一撃必殺の威力はない。だが、弾が撃ちすえる箇所が的確だった。急所、という意味ではなく、右腕を弾けば左腕を弾き、脛を撃ち体勢が崩れたところに飛来する弾は顎を貫く。

それは、まるで人形遣いが己の業を披露するかのように。見事、としか言いようがない——とても、滑稽な喜劇だった。

喜劇に終幕を下ろすのは、文字通りの、弾丸。

た刀を支えに、守人がゆっくりと立ち上がった。

遠くから、三人がこちらに近づいてくる足音が聞こえる。全力で突き出した刀は、鞘に包まれていても十分な威力を発揮したらしく、河童の喉元を正確に貫いていた。

仮に最後の力を残していたとしても、あの三人——見た目が美少女なので侮っていたが、あれだけの力を持つのなら、万が一のことがあっても心配はない。

「——ガッ……ガハハ……ガハハハハ！　いつの世も、我等“妖”の行き着く先は変わらぬか……忌々しい……忌々しい……まったく、忌々しいことだ……」

「……そうかい」

勝利を喜ぶでもなく、自分が敵を倒したことに對する高揚感もなく、ただ淡々とつぶやく。この一撃を放つために放つために重ねた攻撃、そして、少女たちの攻撃によってもろくなつた胸元の一部は、ついに耐えることができなかった。

鞘に包まれた刀は急所を完全に貫き、地面に深く突き刺さり——河童の血液が隙間から絶え間なく吹き出し続けている。

「……で、最初の質問に答えてもらおうか」

どうしてここにいるのか、どうやってここに來たのか。他の鴉はいるのか。他の妖怪たちは？　そしてなにより——

『知らぬな……知っていたところで、話すとても？』

こちらに向ける視線には、倒されたといえども、己の矜持を貫こうとしている強い意思が見て取れた。己の旧敵に打倒されたとはいえ、それで全てを話してやるような誇りなど、欠片として持ち合わせていないのだろう。

「ああ、そうかい。んじゃ、さよならだな」

刀を引き抜き、そこからこぼれる液体にすら眼もくれず、踵を返す。その顔には、感情と言うモノが見受けられなかった。ただ、敵と相対し、ただ、敵を倒した。それ以上もなく、それ以下もなく。

だからこそ——手に掛けた事に対する責任だけは、とらなければならぬ。

足を止め、しばし考える。責任、と言っても彼に出来ることは少ない——どころか、一つしかない。だから、何でもないかのように、平然と、その言葉を口にするのだ。

「——、——」

その台詞に、一瞬虚を突かれたのか、背中を向けたままの守人を見上げたまま——やがて、この世界すべてに響くような豪快な笑い声を上げ始めた。

残った力のすべて、その哄笑。楽しげに、楽しげに。これ以上の楽しみはないというほどに、笑う。

『フ、は、ハハハハ！！なるほど！！ならば我は待つとしよう

！ 貴様の頭蓋を咬み砕く日を夢見ながら……！！ ははは、ハ
ハハハ、ハハハハハハハ！！！！』

やがて小さくなっていくその笑い声を聞き届け——それが完全に消えるまで、それほど時間はかからなかった。
やがて、その存在が在った証すらも消え失せていく。

四肢の先から、まるで全てを無に帰すかのように、泡となり、宙を舞い、幻想の中に溶け込むように消えていく。

その光景を肩越しに見つめる守人の眼に過ぎるものは——はたして、何なのか。

誰にも悟られることなくその感情を封じ込めた彼が、改めて顔を前に戻してみたのは、とりあえず悪魔とかなら簡単にひれ伏すことが出来るであろう、トンデモナイ美少女達の、トンデモナク、キレイな笑顔であった。

第四話 その名は“鴉”（後書き）

どうも、あとがきのたびに死にかけている茨陸號です。

さて、第四話……通算で第五話、初のバトルパート終了です。

東方鴉守伝、初の戦闘は原作にも出てきた、最初のやられや……敵河童さんです。最初の敵と言うことであっさりやられた感があるかもしれませんが、これは妹紅と輝夜によって痛めつけられていたためであり、もしそれがなければ守人はほぼ確実に負けていたでしょう。

鴉になれなかったたのは、勿論理由があります。原作アニメを知っている方はお気づきかと思いますが、そのあたりも後々解明されていきますので、しばしの0待ちを。

補足……になるのでしょうか。

妹紅の喋り方ですが、どうやら調べた限りでは、本来は女の子らしい口調の様です。ただ、他のSSなどを見る限り、男性的な喋り方をする事が多く、服装などからしても、男性的なイメージが強いです。

なので、普段は男性的な口調、からかったり挑発したりするときだけ女性らしい喋り方にすることにしました。

うーむ、それにしてもヒロイン以外の出番が多い。

次の話で、ようやく二人目のヒロイン候補が出せそうですが……。どうなることやら……。うーむ。

そして幻想郷で最初に出会う確率が多い何人かの少女諸君。特に某神社の某脇巫女。

君の出番は少なくなりそうだッ！！ 特に序盤に関してはなッ！！
ふふふ、だって仕方ないじゃない。ヒロイン候補の二人を出すとな
ると、君のいる場所を絡めるのはめんど……ごぶごぶ。難しいんだ
もの。

あれ？ 遠くから何か白と黒の玉のようなものがこちらにむかって
くるような……。

あ、あれは……う、うあああああ！？

（悲鳴は巨大な玉によって押しつぶされた）

第五話 人里の守護者との遭遇

刀を杖代わりにしながら、よたよたと歩く守人を、半ば無視するかのように前に歩く二人の美少女は歩を進める。

一人は、ウサ耳をはやした、ブレザーミニスカートの少女、鈴仙。

もう一人は、もんぺにシャツ、白い髪を脹脛にまで伸ばした少女、藤原 妹紅。

本来ならばもう一人——蓬萊山 輝夜という、絶世の美少女がいたのだが、彼女はあの戦いの後『なかなか面白かったわ。でも疲れたわ』とだけ残してさっさと自宅に——守人が運び込まれた永遠亭に帰って行ってしまった。

名前だけは永琳に聞いていたのだが。一応の挨拶だけしか出来なかったことは悔やまれる。日本人らしい日本人的な体格ではあるものの、見てくれはまさに、傾国の美女、といういで立ちだったのだ。それを言いかけたら、いや、正確には口説こうとしたら、トンデモナイ視線を歩く二人から受けたが。

足取りは、前を歩く二人に比べて随分とよわよわしい。

理由としては至極簡単で、怪我が治り切っていないのに大立ち回りをしたツケと、怪我人なのにそんな事をしたことに対する鈴仙の説教が正座をさせられて二時間にわたって繰り広げられたからである。

「ほら、ちゃっちゃと歩いてください。日が暮れる前に着きたいの

で」

へとへとになる一因を作ったウサ耳少女は、自分のことをまったく攻めることなく、守人の足をせかすように声をかけ続ける。

曲がりなりにも医師の弟子であるためか、自分の体を考えずに戦ったことに相当ご立腹のようで、言葉の端々に刺が隠れずにむき出しになっている。

「おばあさんや、わたしやもうだめかもしれん。ここはいつちよせおつてくれんかのう」

「……私に向けて言ってるなら燃す。というか自業自得だろ」

「うう、世知辛い世の中……僕悲しいっ!!」

精一杯ボケてみるものの、反応は薄い。どうやら、こういう時には反応しない方がいいと鈴仙も学んだらしく、こちらの望むリアクションをしてくれない。もう一人の白髪の少女は、元々そういう方面には疎いのか、首をかしげているだけだった。

「なあ、それよりなんでさっきの戦いの時にその馬鹿長い刀を抜かなかったんだ？ 私もそれなりにそういう武器の類は見てきたが、造りはしっかりしてるし、それなりに業物みたいだけど」

視線が、守人の背に括られている刀に注がれる。結局、振り回しはしたものの、最後の一撃も落下スピードと体重を乗せて強引に突きを放っただけで、一度たりとも抜いていない。明らかに戦い慣れしている動きをしておきながら、抜かないのは不自然極まりない。

実のところ、抜けなかった理由はわかりきっている。しかし、それを全部説明してもいいものかと思うが、彼女たちの助けがなければ勝てなかったのは間違いなかったので、当たり障りのない部分で言

つておかねければならぬだろう。

「はい」

「つと……？」

投げられた刀をきやつちして視線を向ければ、両手を拳の形にして引き抜く動作をしていた。抜いてみる、ということだと判断して柄と鞘を握り、力を入れてみるが――。

「うん？」

刀、というのは基本的に重いものだ。日本刀でも、真剣ならばキロ単位の重さが在る。しかし、振り回すことや、抜き放つことにコツがあるが、抜くことそのものには力はそう必要ない。しかし、抜けない。どんなふうにも力を入れても、ぴつたりと鰐元は閉じたまま、びくともしない。額に汗を浮かべながら持てる力の限りで引き抜こうとするが――結果は変わらず。悔しいのか、慚然とした表情のまま守人に刀を返す。

「と、いうわけなんだ、これが。多分、気付いてると思うけど――普通の刀じゃない。なんつーか、まあ、退魔の力に近いものを持つてる。その力はかなり強くてね、元の世界じゃあ、許可がないと抜けなかった」

抜けたとして、武装として利用できるかどうかは不明だが。

「つまり、その許可を出すことができる奴を探してるのか」

「いや、別にそーいうわけでもない。この幻想郷に来てるかどうかもわかんないし……とりあえず、当面は元の世界に帰ることが目的かね」

「ふうん……」

忘れ去られたもの、という意味では、こちらに来る理由はあるが、確定情報でもない限り、むやみやたらに駆けずり回っても見つけれ
る可能性は低いし、来ているとすれば、刀を察知できないはずが
ない。

「それにしても、珍しいですね。貴女が私たちに同行するなんて、
人嫌いじゃなかったんですか？」

「お前に言われたくない。……慧音からの依頼でね。一か月くらい
前から、里の中で行方不明の人間が

出始めたらしい。慧音が注意してるけど、いまでも迷いの竹林に来
る人間もいるからな。見かけたら護衛をしてくれと言われてたんだ」

数としてはそう多くはないが、それでも、未だに帰ってきたものは
極僅からしく、大半は行方不明のまま。

「そうして出歩いている内に、輝夜のやつと出くわして、殺し合い
をしている最中に乱入されたんだ」

あの妖怪も驚いてるみたいだったけどな、と一言付け加える。

驚いていたということは、あの河童もこちらに来たばかりだったの
だろうか。今更話を聞くことは出来ないし、今の時点でこれ以上考
えるのは意味がないだろう。

「私もあれこれ詮索されるのは好きじゃないから、これ以上は聞か
ないでおくけどな」

視界を覆っていた竹林が開け、陽の光がダイレクトに瞳に届く。真
昼、と呼ぶにはやや日が傾きすぎているが、遮るものがなにもない

せいか、ずいぶん広く感じる。

花に届くのは、深い新緑の香り。元の世界では、とうに失われてしまった、遙か昔の、とても懐かしい、優しい香り。

「見えましたね。あれが人里です」

引き込まれそうになる意識を呼び戻す声に反応し、遠くに見える人の住む“街”へと眼を移す。

街、そう、街だ。

人々が行き交い、商売があり、些細ないざこざが在り、時として悲劇と喜劇が繰り返される、人が生まれ、生きて、死ぬ場所。

出会って、そして、決別　わか　れた場所。

「守人さん？」

「ん、悪い。んじゃま、行こうか」

浮かび上がってくる過去に蓋をして、今までとは違う軽い足取りで歩きだす。

途中の田園の風景や、着物を簡略化したような服装で農作業をしている人間がちらほらと見える。江戸時代……とまではいかないかもしれないが、現代——守人が暮らしていた時間から比べれば随分と文明の水準は低いようだ。

豊かさ、という意味の捉え方によっては、こちらの方がよっぽど豊かかもしれないが。

人里の中に入ってみれば、それは当たっていたと感じざるを得ない。街の中心となる道には、子供たちのはしゃぎまわる声が響き、古典的ではあるが、ベーゴマや竹とんぼなどの玩具で笑いながら楽しげに遊んでいる。

住人の笑い声や商売をする声が絶え間なく響く。そこには、ここに生きる人達の熱が確かに存在していた。ここに人が住むようになってからの歴史からすれば、一瞬の時間なれど、人が確かに生きているという、ここで過ごしているという、確かな熱が。

妹紅と鈴仙は妖怪（妹紅は蓬莱人だが）とはいえ、多少なりと人里との交流もあるため、怪しまれることはなかったが、その後ろに歩いている長身の男性、すなわち守人は凄まじいまでの視線を受ける。どうやら平均身長が低いらしく、守人と比べても10？は低い人ばかり。自然と見上げる形になる上に、背中にはその上背に届こうかという長大な日本刀、それとはアンバランスとも言える黒のジーンズに、白いシャツ、元々かなり着潰していたくすんだ青色のジャケット。

元の世界からこれだった上に河童との戦いでかわしきれなかった水弾がジャケットをぼろぼろにしている。服としてはこれで目立たないわけではない。

外来人、というものは時々迷い込んでいるらしく、極端に不振がられるということはないが——興味は持つらしく、物おじしない子供たち数名が近くまで来て見上げてくる。

「なーなー、にいちやん、これおもくない？」

「服びりびりーおかねないの？」

「へんなかつこー」

「へんー」

いつの間にか子供たちに囲まれて身動きが取れなくなる。

子供たち——とくに男の子たちは背中にある刀にどうしても興味が行くらしく、ぐいぐいと引っ張ったり、やんちゃな小僧どもは足をけったりしている。

どうにかしてくれ、と同行者二人に眼を向けるが、元々子供が苦手なのか、諦めたような苦笑いでごまかすだけだった。

援軍はない。一度好奇心を刺激された子供たちを収めるのはなかなかに難しい。

どうしたものかと悩んでいる内に、ますますちよっかいが激しくなっていく。

「やめんしゃい。人のモノをむやみにさわるもん……」

げし

「だからやめいと……」

げしげし

「やめ……」

げしげしげしげしげし

「やめいといつとるんじゃくおうらー!!」

うがー、と叫び声をあげて右手を振り上げると、蜘蛛の子を散らすように一斉に逃げ回る。その隙を見逃さない。背にしていた日本刀を手に、くるりと回転させてから突き出すと、その延長線上にいた子供の襟に見事に引っかかり、宙に持ちあげられる。

「うわああああ!？」

「一本釣り成功! ふはは、大人をからかった罰じゃー!!」

右手の力だけで宙に持ちあげてぶらぶらと揺らす。140? ほどはあるつかという日本刀に加え、170? の半ばはある長身、右手の位置は胸元にあるので、合計すると3メートル程の高さに男の子はぶら下げられていることになる。

一気に変わった視点とその勢いに泣きわめくと思いきや――。

「すっげー!!! たけー!!! すげー!!! すげー!!!」

歓声をあげて、喜び始めた。子供というものに触れなくなって久しくなる守人にとっては、その特性をつかむのは難しかった。得てして、突然視界を引き上げられた子供は大抵どちらかにわけられてしまふのだ。つまり、泣きわめくか、喜ぶか。

試しに左右に振ってみると、やはり、泣くどころかむしろもつとやっつてと言わんばかりに両手をあげて笑っている。

その楽しそうな様子を見た数名の子供が、その小さな手でいくいと彼のズボンを引っ張り、指をくわえてうらやましそうに見上げている。

普通の人間なら、そういう視線に耐えることは難しい。暫く考えて――諦めることにした。ここの子供たちが向けてくる純粋な笑顔は、色々と考え込むことが多かった心には、すこしばかり優しすぎる。

鞘にひっかけていた子供を下ろすと、その不満たらたらな視線を流しながら、刀を横にして子供たちの手の届くところまで下げて、捕まるように手振り以示す。

守人を中心にして左に二人、右に二人、合計四人をぶら下げると、そこから右手の腕力のみで高く、頭上に掲げる。

再び歓声。ちょっとした大道芸人のような気分で少しだけ誇らしくもある。

「なー、おいらにも!!」

最初に持ちあげた子供が跳びはねながら催促してくるが――

「店員オーバー。またのご利用をお待ちしてまーす、ってか」

「ぶーぶー!!」

しかし、いつまでも遊んでいるわけにもいかない。と言ってもここで子供たちの相手をほっぽりだすのも、何となく気が引ける――と。

「うりゃー!」

背中に、急に重み加わった。最初に持ちあげた子供がしがみつき、よじ登り、ついには肩車の位置にまで収まってしまった。

「おいコラ!」

「へっへーん!! てっぺんとったー!!」

「アホ言ってねえで降りろ! っとお!？」

その様子を、新しい遊びと勘違いしたのか、次々に子供たちが飛びついてくる。一人ひとりなら軽くても、それが数を集めれば凄まじい重さになる。

あっという間に十人近くの子供にしがみつかれた守人は、さながら何処かの広場にでも置かれているようなツリーのような状態になってしまった。

「うわぁ……」

「下手に相手をするからだ」

鈴仙は何と表現したらいいのかわからない、微妙な表情で苦笑いをし、妹紅は経験があるのか、眉間にしわを寄せて溜息をついていた。

「えっと、あの、助けてくれると嬉しいんだけど。重い」

「あきらめろ。そうなった子供は無敵だ。助け舟がくるまで耐えるんだな」

「えー……」

どうやら、二人にこれの解決を任せるのは無理らしい。というか、下手に関わるとばつちりが来るということがなんとなくわかってるのだらう。

力を入れて動いてみるが、その動きすらもアトラクションとしてとらえているらしく、子供は喜ぶばかりだ。というか、刀を持ちあげた右腕も限界近い。流石に子供四人を持ち上げるのは無理があったか。

限界がいよいよ訪れようとした、その時――。

「こら、何をしている！ 危ないからやめるんだ！」

空気を切り裂くように響いた声に、野次馬を含めた全員が視線を向ける。

人がモーゼの如く左右に割れ、その中心から一人の女性が姿を現す。水色を少し薄くした――敢えて言うならな、空の色と呼べる美しい髪を腰まで伸ばし、髪の色が映える裾が広がった濃紺のワンピース肌は白く、手足は細く――身長は高め160の半ばはあるだろうか。

顔立ちは間違いなく美人の部類に入るであらう。その真面目そうな面立ちは“委員長”と思わず呼びたくなってしまふ。少し変わった形の帽子も、アクセントにはちょうどいい。

これらの要素に加えて、スタイルがいい。グラマラス——という言葉葉まではいかないが、バランスが凄まじくよいのだ。

今までに出会った女性（ほとんどが妖怪だが）も勿論美人の部類にはいるだろうが、こちらに向かつて歩いてくる女性は、それらと比べてもそんな色ない——いや、それ以上かもしれない。

「ほら、早く下りないか。あまり人に迷惑をかけるものではないぞ？」

人間ツリー状態の守人に近づくと、しがみついている子供たちに声をかけながら一人ずつ地面に下ろしていく。遊びを邪魔されてダダをこねるかと思いきや、子供たちは素直にそれに従い、地面に降りた後はさつと散らばり、母親や父親達の元へと戻っていく。

あげていた刀からも次々に跳び下り、また遊んでと口々に言いながら走っていく子供たちを見ていると、あるいてきた空色の髪を持つ女性が目の前に来ていることに気付いた。

「妙な服装からして、外来人のようだな。ずいぶんと傷だらけだが……妹紅がなにかしでかしたのだろうか？　だとすれば、彼女に変わって詫びよう」

「慧音！　なんでそーなる！？」

「違うのか？　てつきり、輝夜と殺し合いを邪魔されて反撃したのかと……」

「違う！　こいつはその邪魔した奴とやり合ってる最中に邪魔してきたんだ！　この傷はその時についたもんで、私はなんもしてない」

ふむ、と頷いて、腕を組む。元々、妹紅の人となりについては信頼しているし、間違っても割り込まれたからと言って酷い手傷を負わ

せるような性格はしていない。

「とりあえず、立ち話をしているのもなんですし、落ち着ける場所に移って見たらどうですか？ 私は一応、この馬鹿な人の世話を師匠からするように言われていますので、自分の状態もわからず戦う馬鹿ですが、一応、死なれたら目覚めが悪くなるので」

「……ぐっ。言葉の刃が僕の心をえぐるっ！！」

言葉の節々に感じる刺が心に突き刺さる。が、反論は出来ない。永遠亭が出る時に激しい動きは控えるようにとしつこく言われていたのにも関わらず、あれだけの大立ち回りをしたのだから、苛立ちと言うか、呆れと言うか、そういった感情が刺に成って言葉に乗ってしまうのは仕方のないことだった。

その様子を見て、慧音と呼ばれた女性は、少し表情を崩す。身体の傷や大きな刀にやや面を喰らったものの、この男性の人となりは信用できそうだと——子供たちがあれだけなついたのも、そういった人柄が出ているからなのだと納得した。

「ふむ、確かに。では、とりあえず、私の寺子屋に案内しよう」

す、と右手を差し出してきたのを見て、手に持っていた刀を地面に突き刺し、同じように右手を出し、握手する。

「私は上白沢 慧音。この里で寺子屋の教師をしている」

「大神 守人だ——元の世界じゃ、まあ、自警団の真似事してた。

——と、一つ聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「簡単なことならばな」

「あんたのスリーサイズが知りたい」

世界が、凍りついた。スリーサイズという言葉の響きになにやら不穏な物を感じ取ったのか、周りの三人が一気に表情を硬くしたのが見える。

守人の視線は、真面目そうな外見とは裏腹に、それはそれは豊かに実っている禁断の果実とも言える胸元の丘に注がれていて……身長差のせいか、見下ろす形で谷間がくつきり見えるのだ。

「……………」

笑顔——とまではいかなくとも、表情を緩めていた慧音も、流石に口元がひきつり——。

「ふん!!」

突然、右腕が全力で引つ張られ、無警戒だった守人は大きく身体を前のめりにし——その崩れた顔の、頭的位置に、全力で振りおろされた凄まじい勢いの額が突き刺さる。

頭突き、と呼ばれるその一撃は、人の体が出すとは思えない凄まじい金属音を響かせ、守人 勇者 の気絶という結果を、この地にもたらしたのだった。

第五話 人里の守護者との遭遇（後書き）

えーっと、大丈夫かな？ うん、大丈夫だね？ よし……。ど、どうも、茨陸號です。え、えっとね、怒らないで聞いてほしいんです。

前の投稿が9月の始めで、今回が二週間以上あいたのには海よりも高く、山よりも低い理由がありましてですね。えっとですね、なんというかですね、9月のある日に、あるゲームが発売しちゃってですね、そ、それをやりまくっていたらいつのまにか……。あ、や、やめて、そんな、う、うわああああああ？！！？！？

（炎が突如として彼を飲み込んだ——その後には、塵一つ残らなかった）

「ふん、更新をさぼるからだ。な、慧音」

「……流石にこれはやりすぎではないか？ いや、確かにここまで出番を伸ばされた身としては、いい気味だとおもっ気持ちがないわけではないのだが」

「えー、というわけで、ここからの後書きは私、藤原 妹紅と」

「上白沢 慧音でお送りする」

妹紅「更新が遅れた理由はさっき言ったとおりだ。テイルズ、と言えはわかるだろー、と茨が言ってた」

慧音「一通りクリアした後も二週目に入ったりしていたそうだ。もつとも、この話はクリアする前に書きあがっていたので、結局は作

者の怠慢だが」

妹紅「で、この話でようやく慧音が出てきたわけだ……長いな、出るまでが」

慧音「しかたあるまい。目覚めて即ヒロイン候補と会う展開は飽きていたそうだからな。まあ、もう一人の、まったく出番のないどころの妖怪と比べればまだましだろう」

妹紅「で、次の話はある意味でインターバルになるそうだ」

慧音「話そのものはすでに書きあがっているので、待たせたお詫びに、3日以内に投稿すると言っているぞ。期待してくれている人が何人いるかはわからないが、感想が書かれていて驚きと同時に感動したと」

妹紅「しかし、あの花の妖怪をヒロイン候補にするとは、すげえ度胸だな、作者」

慧音「なんでも、ある動画に影響されたとか。まあ、その辺りはいずれということでは……では、次の話からは私も多く出ることになるそうだから、楽しみにしておいてくれ」

妹紅「そろそろ、プロフィールなども紹介していくそうだ。これに関しては随時更新、と言う形になる」

慧音「では、皆、息災でな」

第六話 これからの道標

気絶した守人は寺子屋に運び込まれ、眼がさめるまで放置されていた。眼が覚めた彼を待っていたのは、三人からのハウリング説教で、それはつい数時間前に味わった説教の二倍の時間を必要とした。

最初は女性にいきなりそういうことを聞くものではないということから始まり、やがて妹紅が「なんで私には聞かなかったんだ。胸か。胸がないからか」と、八つ当たり気味に首を絞めてきた。

あまりにも見事に首を極められた為、危ない色になってきたところで鈴仙に救出されたが、服装からは分かりづらいものの、彼女もそれなりにスタイルがいいので、そこに目を付けた妹紅がよくわからないドロドロとしたオーラを纏って詰め寄り始め、それを守人と慧音が止めるという、わけのわからない構図となり——それが落ちて着いたころには、夕ご飯の時間帯となっていた。

時間がなかったので、慧音が漬けていたキュウリと、卵焼き、味噌汁、自家製のふりかけ。簡単な献立と言っていたが、これだけのモノが並ぶなら大したものだ。

ついでだからと妹紅と鈴仙も同席している。ただし、妹紅は胸の話し云々が響いているのか、若干ふてくされ気味に漬物をかみ砕いているが。

「うめえ……」

「そ、そう褒めてくれるな。照れる」

「いや、これは国民栄誉賞……違う、全人類主婦グランプリの優勝

を奪える……！！　ぜひとも俺の毎朝のみそ汁を作っばろつぷ！？」

となりから飛んできた肘打ちが顎を捉え、なすすべなくダウンを奪われてしまった。

とりあえず何かいろんな負のオーラが溜まっている妹紅はそんな彼の様子に眼もくれずにご飯をかきこむ。

そんな様子に苦笑しながら、慧音は食事の前に聞いた話を思い返していた。

「へ、いいパンチだったぜ……やるな」

ぐい、と口の端からこぼれる味噌汁をぬぐいながらどこぞのスポコン漫画の如き台詞を口にする。あえて言うが、喰らったのはパンチでなく肘である。

「それで……妹紅と輝夜の喧嘩に割り込んできた妖が、君の世界にいた者だった、と」

「ま、そういうこと。結局、どうやってきたのかとか、他の奴はいるのかとか、そのあたりはしゃべってくれなかったけどな」

卵焼きうめえ、と呟きながら答える。

状況から考えて、偶然とは思えない。同じ立場や近い人間が時折同時に来ることはあるが、その場にいなかった——しかも、直接面識がない上に、敵対している関係の存在が同時に幻想郷にくるとは考えにくい。

何かしらの要因があったのか——一番手っ取り早いのは、やはり博麗　霊夢に聞くか、八雲紫を訪ねるかのどちらかだろう。後者を捕まえるのは絶望的なまでに難しいが。

「里の人間が行方不明になっているのも、その妖が原因なのだろうか」

「さてね。そればかりはわかんねえな。無関係、とも言い切れないけど、関係が在る、にしちゃあ、ちよっと違う気もする」

実際、人の生気や血液、魂などを糧とする妖はいた。河童も、少なからずそういう部分はあったが……あくまで見た感じではあるが、まだこちらに不慣れな印象を受けた。

来て時間がたっていなかったのかもしれないが、他の妖が幻想郷に来ていたとして、それらが今よりも遙か前に来ている可能性は……考え続けるときりがない。

「ともかく、今の時間から動くのは危険だろう。博麗の所に行くにしても、一晩泊まっていく方が賢明だな」

「泊まっていいいの？　なんて大胆……！」

「……言っておくが、部屋は別だ」

昼はともかく、夜は妖怪の時間だ。幻想郷の人間でもむやみに夜に出歩いたりはしない。不慣れな外来人が、ここはどこかとうろついている内に妖怪に食べられる——という事件も、何度も発生している。

もとより、その案に反対するつもりはない。

どうやら、他の二人も今日は泊まるつもりらしい。時間が時間と言ふことと、鈴仙は一応守人の面倒をみるため、妹紅は——慧音の貞操を守るため、らしい。

夕食の片付けをして、風呂があるというので意気揚々と向かおうとしたら、ストップがかかった。

「あれだけの怪我してお風呂に入ろうとするとか、馬鹿ですか貴方は」

「まったくだな。身体を拭いておくだけにしておけ。怪我は治りかけが危ないんだ」

「ばーか」

「ぐっ……言葉の刃が心を抉るっ！！ ひどいわっ！！」

よよよ、と泣き崩れてみるが、ツツコミは入らなかった。

冷たい視線と呆れた視線とどうしたものかという視線がグサリグサリと心に突き刺さっていくのがよくわかる。

どうやら、芸風を変えなければならないようだ。といっても、ストックできるほどの芸は他にないのだが。

「さて、寢床の準備をするでしょう——」

崩れ落ちたままの守人を横目に、慧音が号令をかけた——。

第六話 これからの道標（後書き）

妹紅「妹紅と！」

慧音「け、けいねの／＼／」

妹紅・慧音「後書き、コーナー！！（どんどんどんぱふぱふぱふ）」

妹紅「さて、投稿の間隔が短く、作者がまだよみがえっていない。加えて、この話は本当にインターバルみたいなもので、後書きはあつさりいこうと考えて私たちが担当することになった。これからも時々こういう形で東方のキャラの後書きをだすらしいぞ」

慧音「なあ、妹紅。先ほどのやりとりは必要なのか？ 恥ずかしいんだが」

妹紅「さあ？」

慧音「……………」

妹紅「ともかく。ゲーム的に言うなら、ここで選択肢が出て、ルート分岐とかを考えていたらしい。慧音を手伝ったら、私に話しかけたら、永遠亭の兎に話しかけたら、誰にも話しかけずに外に出たら、と言っ具合だ」

慧音「それだけのルートを考えるほど余裕はないだろうに……次は博麗神社に行く話か。遅くなったな」

妹紅「霊夢の出番は少なくするらしい。曰く、異変解決においてはチートキャラなので、あんまり出張らせると話の流れが変わってしまうから、だと」

妹紅「作者を絞り上げた所、どうやら私のルートはプロット程度は組んでいるらしい。今のところ書く予定はないが、もし人気が出た

り、感想に書かれることがあれば本格的に考える予定もあるのかな
いとか」

慧音「それよりもまず、この話を完結させることを考えるべきだな。
その後なら構わないのではないか？」

妹紅「さて、もうそろそろ戦闘シーン欠乏症になりそうということ
なので、次の次くらいには戦闘シーンを入れる予定だそうだ」

慧音「そろそろ話のストックが切れそうなので、こんな稚拙な話を
見ている読者の方々には感謝しかないと同時に迷惑をかける
かもしれないが、気長に待っていただけると嬉しい」

妹紅「それでは！ このたびの後書きは、私、藤原妹紅と！」

慧音「か、かみ、上白沢 慧音が／＼／」

妹紅・慧音「お送りいたしました！！」

幕間乃壱 華は踊る。闇夜に踊る。

永遠亭。その研究室——八意 永琳の根城ともいうべきその場所は、本来——彼女以外には永遠亭に住まう者しか入室を許されない場所だった。

試験官に入れられたちよつと危うい紫色の薬や、調合途中かと思われる粉薬、原料と思われる先端に口がついて蠢いている根っこなど、普通の人間が見れば間違いないくその鼻を突く異臭と共に嫌悪感が先に来てしまうであろう場所でも、その場にいる、二人にとっては気にする必要のないものだった。

一人は、勿論この部屋の主。これは当然——しかし、対峙するもう一人を幻想郷の住人・妖怪が見たら、最終戦争でも始まるのではないかと身構えるだろう。

宝石のような輝きを持つ深緑の髪、血を啜ったかのような赤い瞳を持ち、その手にトレードマークとも言える日傘を持つ女性——いや、花の妖怪。風見 幽香。

「それで、どういった用があるのかしら、貴女の要望通り、ちゃんと彼を助けてあげたけれど？」

呆れたような溜息と共に、椅子を回転させて、壁に背を預けている幽香に向き直る。

前回突入——壁を破って入ってきた時に散々言ったおかげで、今回はちゃんと玄関から入ってきたのだが、この部屋に無遠慮に入ってくるなり不満げな様子で、何もしゃべらなかつたので、痺れを切ら

した永琳が強引に話を進めたのだ。

「花が教えてくれたのだけれど……左腕、失くしたままみたいね？
どういうことかしら」

鈴の音を転がすような声、しかしそこにあるのははっきりとした不満。もちろん、永琳とて正面から戦っても遅れをとるつもりなどないが、まさか自分たちの根城のど真ん中で弾幕ごっこを始めるわけにもいかない。

「あのね、私は医者よ？ いくらなんでも、失くした左腕を再生することは出来ないわ。ちぎれた左腕があればそれをつなぎ合わせることは出来るけれど……見つけた時、周囲にそれらしいものはなかったの？」

「あつたのは、あの男と刀だけよ」

「それじゃ、どうしようもないわ。左腕と彼を引っ張ってくるなら、勿論治療はするけれどね——でも」

言葉を切って、思考が始まった。

確かに、彼は左腕を失っていて、その断面は鋭利な刃物で絶ち切られた後があつた。しかし、その傷跡はふさがりかけていて、しかも何らかの呪術的な——と言すべきか、魔術的な修復の痕跡のようなものが見受けられたのだ。

同時に幽香が持ち込んできた刀から感じた、とてつもない力の断片。もしかすると、あの刀に関係しているのかもしれない。失った左腕のことや、あれだけの怪我をした理由も——ここに来る前に、戦っていたと思われる存在が握っている。

そして、何より――。

「（いえ、そこは私が突っ込む所ではないわね。見た目に反して、想像以上に頭が切れるみたいだし）」

「……何か、隠していることが在るのかしら」

「医者は、不必要に患者の情報を他人に伝えないものよ。それがたとえ助けた者だとしてもね」

「……」

表情は動いていないが、やはり不満気だ。彼女が何を望んでいるかは分からないが、あまりここに長居をさせて、妖怪兎達や輝夜にストレスをためるのはあまりよくない。

特に輝夜のワガママがいつ発動するかわからないし、永琳自身、いつまでも幽香と顔を突き合わせていたいわけではない。

「はあ……患者のことは言えないけれど、別の情報をあげるわ。それでいい？」

「早く言いなさい」

やれやれ、とコメカミを抑えながら、幽香が訪ねてくる数時間前に帰ってきた輝夜から聞いた話を口にした。

「輝夜と藤原 妹紅、優曇華が彼と同じ世界からやってきたらしい妖と戦ったらしいわ。その時に言っていたことらしいのだけ――他の奴が来てないか、どうしてここに来たのかを尋ねていた。結局、何も聞き出せなかったみたいだけれど……倒した妖の口ぶりからすると、何かを知っていた様子だった、と」

「……」

「後は、本人に聞きなさい。私じゃあ、深く聞いても答えてくれなかったし。どうにも、そういった自分のことを聞かれることに忌避感を抱いているような。恐怖、と言ってもいいかもしれないわ」

あるいは、自分のことは自分でどうにかしようとしているのか。他人に頼るということそのものに怯えているようにも見えた。

「彼が持っていた刀、輝夜の見立てでは、“抜かない”のではなく“抜けない”みたいね。封じた人がいるのかしら？」

一通り聞いたうえで、これからどう動くかを決める。

今現在、人里にいるのはわかつている。ただし、人里の守護者——上白沢 慧音。藤原 妹紅。鈴仙・優曇華院・イナバの三人と一緒にいるとなると、色々と面倒だ。

元いた世界で敵対していた妖がこちらに来ていたということは、他の者たちも流れ込んできている可能性が高い。そちらを探して回ったほうが効率的だし、何らかの形で彼にメリットになることがあれば、それを対価にこちらの望みをかなえてもらうのも可能だろう。

幸いと言つべきなのか、彼女にとって情報を手に入れる手段には事欠かない。

微かに、本当に微かに口の端を釣り上げて微笑むと、形だけの礼をすると同時に、幽香はすぐに永遠亭を後にした。

その様子を眺めながらどうかもう二度と来ませんように、と適当な神様に祈りをささげる。だが、残念なことにそういった願いを聞き

届けてくれる神の知り合いは、この幻想郷にはいなかった。

「塩でも撒いておこうかしら……効果があるとはおもえないけど」

風見 幽香が、その撒いた場所ごと吹き飛ばすタイプの妖怪であることはわかっているの、再び溜息をつくしなかった。

幕間乃壱 華は踊る。闇夜に踊る。（後書き）

我は死なず……我は死なずッ!!

復活しましたー!! 茨陸號でっす!!

いやー、とりあえずテイルズもひと段落。と思いきや、遊戯王のゲームが出てる……やりたい……けど、やったら執筆が遅れる……書きたいけど……ゲームもしたい……は!! いやいや、今回は我慢しますよ? いえ、まあ、やるんですけど、ちゃんと執筆もしますよ? 楽しみにしてくれている方がどれだけいるかわかりませんが……がんばります!!

さてさて。今回の御話は、個人的超メインヒロインともいえる幽香様!

プロットというか、考えている話の流れだと、この後2〜3話は出番がなさそう……それは流石にどうよ、ということで、本編で主人公や慧音先生が出ている間、幽香様はなにやってんの? という疑問を持つ方もいらっしゃるかな、と思ひまして、この話を考えました。

これからの予定としては、第七話 幕間2 第八話 とい

う形で行くと思います。第九話が第十話くらいで本編に幽香様合流、という形で考えております。

間にプロフィール紹介を入れるかも?

あ、ちなみにこの話自体は本編の第6話とほぼ同軸の時間上のことです。

これからもっと幽香様の出番が増えますので、どうぞよろしくお願

い申し上げます……と、こ、こんな形でよろしかったでしょうか。

??「端々に気にいらないところはあるけれど、いいわ。この幕間の話……？　は私が主役みたいだし」

そ、それは勿論。あ、あと、後少しだけまっただけですか？

??「でも。今まで私をながしろにしていたツケは払ってもらわないといけないわ。ちよつと熱いけど……大丈夫よね？」

え、ど、どうして傘がこちらに向いてるんですか？

あれ？　いつの間にか両手と両足に花の蔓が撒きついて動けな……。

ぎゃあああああ？！

第七話 博麗の社、鬼の言

布団に入っただまま、結局一睡もすることなく朝を迎えた。

頭の中をぐるぐると回る疑問や不安、それに対する答えを出そうとしてがんばってみたが、ついで出ることとはなく、最終的には“なるようにしかならない”という投げやりなものしか絞り出せなかった。

わざわざ布団を敷いてくれた慧音には悪いが、どうにもあの布団と言うものに慣れていないせいなのか、身体の節々も痛い。もっともそれは精神的な物も多分に影響を与えていたのだが。

いつまでいるかわからないので、慣れるかどうか分からないが、もし、ここが自分にとっての“街”となるのなら、ぐっすりと眠ることも出来るだろう。

異様な音を立てて身体を伸ばし、骨と筋肉をほぐす。流石に昨日の戦いの影響が残っているが、元々施された治療がほぼ完ぺきだったせいか、思っていた程ではない。

綺麗な空気を胸一杯に吸い込み、縁側から外に出る。

上白沢 慧音という女性は、人里に寺子屋を開いている。元々、幻想郷における歴史書の編纂をしているらしく、知識量も豊富であるために、自然とそういう立場になったという。今いるのは、寺子屋に併設された彼女の家の一室だ。

何らかの理由で流れ着いた外来人を一時的に宿泊させるときも使っ

ているらしく、ある程度のモノはそろっていた。その中にあつた、使い古されたおかげで中心に穴のあいた湯飲みをおく木の板を四枚、そして刀を手に庭に出る。

文明が隔絶されている——元の世界ではもはや絶滅しかかっている井戸から水を汲み、何とも言えないだるさを吹き飛ばすために頭からかぶり、乱雑に布でふき取った後、右手の刀に穴のあいた木の板をひっかける。

「ふっ——！！」

手首の返しだけで木の板を全て空中にほおりなげる。

不規則に、回転しながら舞い上がるそれを見届けながら、右手の刀を手の中で回転。

そして——放つ。

木の板が、踊る。

弾く。

木の板が、跳ねる。

弾く。

木の板が、宙を舞う。

弾く。

己の身長程もある長刀を、まるで重量がないかのように、舞うが如く。

打倒するための業でありながら、打倒するがゆえの美しさを持つ。空中に浮かぶ木の板はまるでそこが自分の舞台だといわんばかりに居座り続け、これからもその存在を主張するものだと思われた。

「あ」

五分ほど続いたその独演会は、握りの甘くなつた掌から少しだけ刀が零れたことで終わりを告げた。

糸が切れた人形のように木の板は次々に落下し——最後の一つが縦向きに落ちると、今まで加わっていた回転のままに転がり、一人の人物の足に当たる。

「——本来なら、部屋のモノを勝手に使つたと怒るところだが、見事な物だな。その剣技は自警団とやらで教わつたものか？」

寝起きに聞いた声としては、最上級。文句のつけようがない声だ。

「いんや、そんな大層なもんじゃないさ。これを覚えてきつかけも、はつきり言つて褒められる類のものじゃない。ま、そうせざるをえなかったからそうなつた、つてところか」

「……」

その言葉に、何かを感じ取つたのか、慧音は足元に転がっている木の板を拾い上げ、そのあいた穴ごしに守人を見つめる。

実際、先ほどの剣は素晴らしかった。冥界の半人半霊が二刀の刀を扱うが、それと同等——あるいはそれ以上のものを感じた。とはいっても、特別な型などがあるわけでもなく、我流の色が強いようではあつたが。

「そうか。それはともかくとして、朝ご飯の用意ができているのだが……食べるか？」

「勿論。あんたの作った飯は美味いからな。状況が状況でなきゃプロポーズしたいくらいだ」

「したいならその寝癖をどうにかすることだな」

「……ありや」

言われて手を頭上に持っていけば、水をかぶった程度では何ともならなかった寝癖が、大量に自己主張をしていたのだった。

昨日の夕食をした居間に入ると、そこにいたのは白い髪の少女——妹紅だけだった。

聞いてみると、鈴仙は薬の補充や今現在の守人の怪我の具合を報告するために一度永遠亭に戻るとのことらしい。

「で、これがその間の飲み薬だつて。死ぬほど苦みがあるらしいが、死ぬ覚悟で飲まないとよくならないと」

「……飲みたくねえ」

薬は元々苦手なので、全力でお断りしたいところだが、この場には味方はいないのである。

片方の少女は守人が苦しむことにはさして興味がなく、もう一人は真面目を超高密度で圧縮したかのような教師なのだから。

「良薬口に苦し、だ。せつかく薬師が調合してくれたのだ、飲まないと怪我はなおらないぞ?」

「……薬を飲むくらいならそれもいいかも shouldn't」

子供じみた口で不満を漏らす守人を呆れた表情で見つめる。見た目は若干童顔ではあるものの、体格的にも成人した男性なのだが、どうにも端々に子供っぽさが残る。

子供たちの相手をした時も、からかってきた時も。まあ、そういった色々な変化は、見ている分には面白いのでかまわないのだが。

「それで、今日は博麗神社に行くのだろう?」

「んー、まあ、そのつもり。すぐ帰る云々は別としても、帰れるかどうかは確認しておきたいしね。あ、漬物うめー」

「ふむ……」

少し考える。人里から博麗神社までは一本道——というほどでもないが、迷うほどでもない。夜ならばともかく、昼間ならば妖怪に出会う危険もないし、妹紅から聞く限り、そして今朝の刀の扱いを見る限り、やすやすと喰われるような軟な人間ではなさそうだ。

それとは別に、博麗 霊夢には聞いておかなければならないことがいくつかある。行方不明者の件について、異変だと認識していたら、何らかの行動を起こしているだろう。

「私も丁度博麗に用事がある。案内がてら同行しても構わないか?」

「そら、構わないけど。旅路には華があつたほうがいいし」

「妹紅。すまないが私が留守の間、里を頼めるか?」

昼間に活動をし、かつ人里に殴りこんでくる妖怪はまずいないが、行方不明者の件もある。用心に用心を重ねても無駄になることはな

いだろう。

正直なところ、人里に長居をするつもりはなかったが、ほかならぬ慧音の頼みならば了承せざるを得ない。渋々ではあるが、首を縦に振るしかなかった。

「では、早めに出るとしよう」

「あいあいさー」

こうして、博麗神社への同行者が決定したのだった。

道中にさしたる問題はなかった。人里を抜けるまでは、昨日相手にした子供たちが駆け寄ってきて、刀で釣りあげられるのを所望したが、隣にいる慧音が一人に頭突きをすると、見事に収まった。どうやら、人里での御仕置きの代名詞は彼女の頭突きらしい。

確かに、あの一撃は凄まじかった。どうやったらあんな破壊力を生み出せるのか。彼女の頭がい骨はチタン合金か、未知の超合金なんたらあたりで出来ているのかもしれない。

「では、行こうか」

と、里の外れまで来たところで、手を差し出してきた。何が？と聞くのも失礼な気がしたので、とりあえずその柔らかい手に右手を重ねると、ぎゅ、と手を強く握られた。

美人で妙齢の女性に——少なくとも見た目は、だが、手を握られて興奮しない男はまずいないだろう。特殊な一部を除き、勿論守人も若干心拍が上がったものの、それを顔に出すようなことはしない。

そうしていると、ぐい、と手が引つ張られ——左腕を失っているとはいえ60キロ近い守人の身体が空中に引つ張られる。

驚いた眼で足元から視線を戻すと、手を引つ張っている慧音の体はすでに宙に浮いており、その上昇と共に地面から足が離れていた。

ありていに言えば——二人は、空を飛んでいるのだ。もっとも、飛んでいるのは慧音で、それにつりさげられているのが守人、と言う形なのだが。

「……こりゃ、驚きも桃も木だな。妙な弾を出したり、焰出したりしているところは見てたが、まさか空まで飛べるとは思わなかった」
「誰でも、というわけではないが……主な妖怪や一部の人間は大抵飛べるぞ。というよりも、弾幕ごっこをするにはまず飛ぶことが最重要だからな」

地上での戦いを得意とする者たちがいないわけではないが、その者たちでも空は普通に飛べる。

原理云々が気になるものの、そのことについて深く突っ込んでも答えが返ってくる可能性は低いだろう。こういう不思議な現象の場合、当人は感覚で行っていることがあるからだ。

「言葉とは魔逆で、驚いている様子はないが」

「んー、人が空を飛ぶ、っていうこと自体には驚いたけどな。他のモノに頼って、っていうことになるけど、空を飛べないわけじゃないし」

「元の世界では、ということか。どういった世界なのか気になるが……」

「この状態で話すのも疲れる？」

からかうような笑みと共に言葉をかけると、帰ってきたのは考えていたことを当てられた、ばつの悪そうな苦笑。そういうものでも、美人がすれば十二分に魅力的なものとなる。

「さて、そろそろ見えてきたな。あれが、この幻想郷を守る博麗大結界を管理する巫女が住む——博麗神社だ」

空を飛ぶこと約20分、見えてきたのは、古き良き——という文言がついてしまいそうなほどに素朴な、それでいて荘厳とも言える何かを感じることのできる、小高い山の頂上に坐する神社だった。

ゆつくりと着地した守人は、周囲を確認の意味も込めてぐるりと見回す。

造りや構造、配置してあるものなどを見る限り、元の世界にあった“神社”とほぼ同じようなもののようにだ。本来なら少なからずいるはずの、神社を管理する人間がまったくいないことを除けば。

「この博麗神社は基本的に巫女一人しかいない。宴会などが開かれる時は別だがな。ここに訪ねてくる者はいるにはいるが」

重ねて言うなら、此処に来る“人間”はほとんどいない。大半が妖怪か魔女で、人間の知り合いは——一人、二人……人里に後十数名といった程度か。用事や異変がなければ基本的に外に出ることはないので、人里にいる人間との交流も少ない。せいぜいが、食べるものを買う八百屋や酒屋程度のものだ。会うたびに注意というか、助言をしているが、一向に聞き入れられることがない。

神社の母屋に近づいていく中で、やはりここが何らかの起点となっ

ているのは感じる。流れ、とでも言うべきか。この場所そのものがそういうものが集まりやすい所にあるらしい。風の流れに乗って、そういったものが肌をなでるのがわかる。

ついでに――肌をなでるものの中に、異物が混じっていることも。

「……」

つい、右手が背中中に括っている刀に伸びそうになるのを堪える。その動きに反応して回りも“ざわついた”のがわかる。

「霊夢、いるか？」

障子に向かって声をかける。

よく通る筋の入った声に反応したのか、襖の奥から誰かがごそそと動く音が聞こえ、ゆっくりと、面倒くさそうに、一人の少女が姿を現した。

腰まで届く艶やかな黒髪を赤いリボンでとめ、巫女服……というには若干独自色が強い、脇の開いた紅白の衣装を着こんでいる少女。背は慧音とくらべると頭一つ近く低いが、存在感と言う意味では同じくらいか。少なくとも、華奢な見た目とは違う確かな力を感じる。

もつとも、その瞳には明らかに面倒くさそうなことがきたという辟易の色が見て取れたが。彼女の奥に見えるのは、机の上に乗った酒の瓶。一人で酒盛りでもしていたのだろうか。にしては、徳利が二つあるが。

「慧音、あんたがくるなんて珍しいわね」

「また昼間から酒盛りか……ほどほどにしておかないと痛い目を見るぞ。弾幕ごっこはともかく、身体は普通の人間なのだから」

「うつさい。いつ、どこで、どうやって飲もうが私の自由よ。それで、用件は後ろの人？」

「ああ。分かっていると思うが、外来人だ」

そこまで言われて、ようやく守人は前に出た。同じ場所に立つと、やはり身長差がもろにでる。170の後半はある守人と、目の前に立つ巫女の少女では30？近い身長差が在る。

「どうも、ダンディでナイスガイな私、大神 守人です。ご機嫌麗しゅう」

「博麗 霊夢よ。気持ち悪いからその口調やめて。普通でいいわよ」「あ、そう？ ま、それならそうしますか。まあ、短くなるか長くなるかはともかく、よろしくってことで」

霊夢、と名乗った少女は、とりあえず頭の前から足の先まで守人を観察し——一瞬、やはりその左腕に目がとまるものの、そこでそのことについて何かを突っ込んで聞こうとは思わなかったらしい。

「元の世界に帰りたい、ってことでいいのかしら」

「まあ、そうなるかな。で、実際どうなんだ？ すぐに帰れるのか？」

その言葉の中に込められているものを、察することが出来る人間はいないであろう。期待と、不安、怯えも混じりながらも——ある強い意思が込められた、その中身を。

「可能なら、すぐ帰してあげるけどね。あいにく、そうもいかないのよ」

「どういうことだ？」

割り込んできたのは、慧音だ。守人を帰すというのは勿論のこと、もうひとつの個人的に聞きたいことに関係しているのでは、と考えたらしい。

「結界が不安定なのよ。穴がある、とかそういうのじゃなくて……安定と不安定が交互に来てる、って感じがしら」

「つまり？」

「今現状で“帰す”のは無理ね。どこに出るかわからないもの。安定したらすぐにでも帰せるわ。ただ、それがいつになるかはわからないけどね」

一応、紫にも伝えてはあるけど、と最後に付け加えた。

単純に言えば、今は帰れません。いつ帰れるかもわかりません。ということになる。ただ、帰れる時になったら間違いないで帰れるのはほぼ確実のようだが……なんとも言えない結果である。

「……真面目にやっているのか？」

「やってるわよ。ただ、前例がない形の異常だから。さてはて、いつになることやら」

その態度に、説教をはじめようとしたものの、当の本人を——つまり、守人を置き去りにしていることに気付いて額を抑えながら溜息を吐く。

こと結界にかんしてはこの不真面目巫女は真面目巫女になる。態度や口調はともかく、やることはきっちりやっているのだろう。

「守人、どうやら、すぐに帰れるわけではないようだが……どうする」

「どうする、と言われても……ああ、俺が来る前後、同じようにここに迷い込んだ奴はいるか？ 人や妖怪関係なしに」

「さあ？ その辺りはわからないわ。運よく人里にたどり着けばここまでくことはあるけど、大抵は迷ったまま妖怪に食われちゃうから。ここに来る理由も色々だし、そのすべてを把握できるわけじゃないわよ」

可能性はゼロではない、ということか。いや、むしろすでに可能性の一つとして出会ってしまった以上——もう、決まっているのかもしれない。

すぐに帰れないと分かった以上、そのことについては確認しなければならぬ。少なくとも、此処にいる住人に被害が及ぶようなことだけは、回避しなければならぬ。

心の奥底で固まってしまった一つの決意は表に出さず、聞いておきたいことがもう一つあった。

「後……風見 幽香ってやつがどこにいるか教えてもらいたいんだが」

その言葉を言った途端、二人の表情が一気に強張った。眉間にしわを寄せ、嫌悪感とまではいかなくとも、明らかに良い感情を抱いていないことが眼に見えて分かる。

「……幽香がどうかしたの？」

「いや、こつちに来た時に怪我をして気を失った俺を永遠亭まで運んでくれたらしいから、礼の一つくらいはしたいと思ったんだが……」

『アイツが！？』『ありえん！！ どんな天変地異だ！？』

ほぼ同時に、異口同音で驚愕の声が響く。

あの永琳も同じような表情をしていたあたり、どうやら相当に問題

のある——いや、その行動をすることがまず有り得ない人物であるようだ。

特に慧音の驚きようは凄まじく、こめかみを流れる汗といい、限界近くまで開かれた瞳といい、全身の震えといい、相当なものだった。

「えっと……どんなやつなんだ？ 具体的に」

その言葉に、慧音はようやく驚愕から立ち直り、霊夢と顔を見合わせた後、知っている限りの情報を伝えてくれた。

曰く。

とんでもないサデリストであり、幻想郷でも屈指の実力者。花の妖怪であり、花を傷つける者に対しては容赦をしない。人を助ける、ということからもっとも遠い存在。

他にもいろいろあったが、まとめるとその三点に絞られるだろうか。

「怪我人を助けるような奴じゃない、と」

「考えられないな。半死半生でこちらに来たのだろう？ そんなものが目の前にいたとしても、わざわざ永遠亭まで届けることが考えられない。せいぜい、人里の入口に放置する程度だ」

もし、あの怪我で放置されていたら、夜明け前に確実に命を落としていただろう。

「私も同感だわ。話した回数は少ないけど、そういうことをする奴には見えなかったし」

「う、うーん」

嘘をついているようには見えない。永林も態度や口調は違ったが、概ね似た想いを抱いていたようだし、鈴仙も同様だった。

じゃあ、なぜ？　なぜ、どんな理由で助けたのか。

考えられるとすれば――背に括っている刀。これが自衛の構えをとったことで、その内包する“力”を察知したと考えるのが一番妥当な線ではあるが、それだとしたら、なおのこと助ける理由がわからなくなる。

考えても仕方ない……助けた理由如何によつては、近いうちに会うことになるだろう。

嫌な方の予感で、その可能性をビンビンに察知してしまっているのだ。今までの経験上、そういうタイプは後々厄介になることしか運んでこない。

「そこまで言うとな逆に興味がわくんだけだな」

怖いもの見たさ、という、ある意味で悪癖とも言つべきものが発動しそうになるものの、霊夢はともかくとして、慧音は本当に心配しているようであるし、少なくとも怪我が完全に治るまではこちらからというのはやめておいたほうがよさそうだ。

となると、結界が治るまでの間、どこにお世話になり、何をして過ごすか、ということになってくるのだが――。

「そっぴゃ、人里で行方不明者が出てるとかなんとか言つてなかったっけ」

「ああ。そうだった。霊夢、その件について何か分かったことはあるか？」

前回来た時に、出来れば調査をしておいてくれ、と話しておいたのだが……。

「無茶言わないですよ。こっちは結界の調査と修復にかかりつきりだったんだから……代わりに、萃香に頼んでおいたわ」

「あの鬼にか。して、どこにいる？」

「そこよ」

びし、と指をさしたのは、守人。正確には、その頭のあたり。なんのこっちゃ、と首をかしげようとした瞬間。

「うおっ?!」

両肩に突然発生した重量にバランスを崩してうつぶせに倒れる。もろに顔を打ってしまつて痛いことこの上ない。何が起こったのか、首を無理やり自分の背中へと向けると、そこにいたのは、瓢箪を煽り、喉を鳴らしている、二本の角を生やした、酒臭い幼女だった。

「ぷはあ！　なんだい、私一人の体重も支えられないのかい？　つい昨日、あれだけの戦いをやったからどんな剛の者かと思つたら、期待はずれだねえ」

「そ、その貧相な身体に見合つた重さじゃないだろ。ぐ!？」

反論した瞬間、更に重量が増して、骨がきしみ始めた。

「言うねえ。あんたの好みはその先生みたいなのかい？　そりゃあ、悪かつたね」

「伊吹！　彼は怪我人だぞ！」

「おっと、怖い怖い」

全く怖がっていないそぶりです。その少女は守人の上からようやくどいてくれた。

服に着いた汚れを払いながら立ち上がると……やはり、小さい。守人の胸に届かないくらいしか身長がないが、その風貌はかなり特徴的だ。手に持った瓢箪と、二本の角、身体に巻き付いた鎖と——何より、その気配。

「鬼、か？」

「へえ、やっぱり気付くんだ。その通り、鬼さ。名乗る時は自分から、というしね。私は伊吹 萃香。あんたは？」

「大神 守人だ。よろしく……と言いたいが、覗きの趣味は止めることを勧めるね」

「そりゃあ無理だ。数少ない私の楽しみだからね」

からから、と笑いながら手を差し出し、軽く握手をする。妹紅や鈴仙、勿論慧音もそうだが、左腕がないことはあまり気にしていない——いや、気にはするが、そのことで守人自身を見る目に変化がない、と言った方が正しいか。

（ま、その方がありがたいけどな）

聞くところによると、彼女は密と疎を操る程度の能力を持っているらしく、簡単にいえば、密度を“強く”したり、“薄め”たりすることが出来るほか、薄めたうえでその範囲に適した密度にかえることが出来たりと、まあ、色々なことが出来るのだという。

あまりにも範囲が広すぎるので、深く考えるのはやめにしておくことにする。

ちなみに、自身を“散らし”ておくことも可能で、幻想郷に広げることでも不可能ではないらしく、その応用で色んな事を知ることができるのだという。もっとも、常時発動しているとそれはそれで疲れるらしい。

「ああ、それで、人間が行方不明になっている件だったかね。少なくとも、前回頼まれた時からそうだったことはないみたいだねえ」
「ふむ」

「そのかわり、消えたらしい場所には妖怪の力が使われた残滓があったよ。わかったのはそれくらいかね」

人が妖怪に食われる、というのは——この幻想郷においては別段不思議なことではない。

ただ、人が消えるのとは違う、妖怪であるがゆえに必要な事。しかし、その数が多くなれば幻想郷のバランスは崩れてしまう。人を食う、と言う行為と同時に、妖怪を恐れるということそのものが、妖怪を妖怪たらしめているのだ。

それがなくなるまで喰ってしまえば、自身の存在そのものを殺すことになる。その程度のことは、幻想郷の妖怪ならば、上級の者から低級の者まで理解している。

今までにいなくなった——少なくとも、発覚してからいなくなった人間の数は、すでにその枠を超えつつある。

「どんな新参なのかね。相当な隠行に長けた奴なのか……」

つまり、幻想郷に迷い込んだ新たな妖怪の仕業なのか。

「それなら、その消えたって場所に行くしかないんじゃないか？
ほら、よく言うだろ、犯人は現場に戻るって」

「……そうなのか？」

「いや、俺も聞いただけ。でも、残滓があるってことは何か“残つてる”ってことだろ？何かしらのヒントくらいはあるんじゃないか？」

「なるほど」

消えた日がいづなのかにもよるが。

納得した様子の慧音と、飽きてきたのか欠伸をかます巫女と、面白そうに見つめる鬼。

「それはそうと、これからどうするつもりなのだ、君は」

これからの指針が決まったらしい慧音は、改めて守人に向き直る。美人に見つめられるのは嫌いではないが、それはともかくとして、今現在帰ることができないのなら、暫くの寢床が必要になってくる。この神社や永遠亭も一つの案ではあるが、結界のなんやらがわからないのにここに世話になるというのも気が引けるし、なんというか、此処の主である博麗 霊夢は気難しそう——というよりつかみどころがなさそうだ。こき使われそうな予感がビンビン来ている。

「先生が迷惑でなけりや、厄介になりたいんだけどな。その代わり、家事炊事と、事件の真相を暴くのを手伝うってのはどうだ？ 真実はいつも一つ！ ってね」

「それは——確かに私にとっては有難いことではあるが、いいのか？」

「——いいさ」

——どちらにしろ、やらなきゃならないことだ。

風にすら乗らないその眩きが、この場にいる他の者たちに聞こえる

ことはなかったはずだが、ほんの僅かに、ほんとうに少しだけ変わったその気配に、萃香は僅かに眉根を寄せた。

「ふむ、ならば、早速で悪いが行方不明者がでた里の外れに行ってみるとしよう。霊夢、手間をかけたな」

「別に。一応こっちでも調べとくけど、結界が優先だから、あんまり期待しないでよね」

話は終わり、と言わんばかりの口調で部屋の中へ戻っていく。それを見届けた後で、さて歩きだそうとしたところに、後ろから声がかかる。

「なあ、人間。その刀、重くないかい？」

歩みが止まる。振り返る守人が移すのは、先ほどと変わらない鬼の少女。

だが、しかし。見つめる瞳が移しているのは、一体何なのか。守人が、それとも、その奥にあるモノか。

「……重くない刀なんてあるか？」

「はは、それもそうだね。その刀がどんな道をたどったにしろ、刀は殺すための道具だ。滅ぼすための道具だ。絶やすための道具だ。重くならないはずがない」

振るえば振うほど。殺せば殺すほど。使えば使うほど。

“それ”は必ず重さをもたらす。同じ場所へ引きずり込もうと、いつでも手を招いている。一步でも立ち止まれば“それ”はあつという間にその牙を突き立ててくる。

それを回避する手段はただ一つ。齒を食いしぼり、ただひたすらに進むしかない。

「で、結局何が言いたいんだ？　これを半分背負ってくれるのか？
鬼が」

「いやいや、そんなことはしないさ。それはあんたのモノだろう？
重さに潰されるも、振り払うも、抱えるも、捨てるも、あんた次第さ」

おちよくっているのか、励ましているのか。そのどちらともとれる
言葉を残しながら、徐々にその姿が薄れていく。

「ちゃんと見ときなよ、上白沢先生。男ってのは、大概無理と無茶
をしたがるもんだからね」

人を食ったような笑みを残しつつ、直後、その姿は宙に溶けて消え
ていった。

掴みどころがない——そう揶揄されることの多い八雲　紫とは違い、
伊吹　萃香は同じような言動はすれど、信用度は段違いだ。

元々、彼女自身が嘘を嫌う為に、その言葉にはそういったものがな
い。どちらかと言えば、考えさせることを目的としている場合の方
が多いくらいなのだ。

それが意味することは、一体何なのか。

「さて、ほんじゃま、行くとしますか。ここから近い？」

今までの会話などなかったかのように——なかったことにするか
のように、明るい声で慧音の背中を押す。

「あ、ああ。飛んでいけばすぐにでも着く」

誤魔化していると明らかにわかる行動にも、深く言及することができない。

上白沢 慧音は、大神 守人のことを、何も知らない。何をしていたのか、何をしようとしているのか。

その笑顔を見れば見るほど、そこに彼自身を見ることが出来なくなってしまう。

まるで、何かがその行為を阻んでいるかのように。

振り返る。見えるのは、参拝客のいない神社と、そこを抜けるそよ風だけ。

あちらが気付いたのか、うかつにも気付かれたのか。そのどちらなのかを確かめるすべはない。

どちらにしろ、今は進むしかないのだ。どんな結末が待ち構えているとしても。

第七話 博麗の社、鬼の言（後書き）

まだだ、まだ終わらんよ！！

は！ここは……いつもの場所……ふう、なんとか生き返ることが出来ました。

ちょっと間があいてしまいました、楽しみにしてくれている方にはすみません。

作者の茨陸號です。

さて、幻想郷においては不可避の場所、博霊神社での一幕。

グータラ不良巫女 博麗霊夢と、覗き趣味の口リ鬼 伊吹萃香さんの登場となりました。

基本、中心は守人と幽香様と慧音さんの三人なので、そこまで出番は多くはありませんが、萃香は気にいつているキャラの一人ですし、霊夢はその特性上、ある程度これからも出てくる予定です。予定は未定ともいいますが。

萃香の能力についての説明ですが、若干？簡略化しました。

色々調べてみますと、用途の範囲も広いですし、言葉で説明するとその説明がかなり長くなりそうなので……萃香ファンの方には申し訳ないです。

見てくださっている方と解釈が違うかもしれません。こうした方がわかりやすいよ、とアドバイスがあれば、遠慮なくおっしゃってください。

ただ、作者の心はキッチンペーパー並にもろいので、やわらかく、やさしく願います。

さて……これからの予定としては、以前お話したとおり幕間を挟み、八話、九話と続いていきます。

これから絡んでいく東方キャラとしては……同じ名前を冠する種族のあの人とか、地獄の怖い人とか、人里ということとある完全記憶能力を持つ女の子とか……その他にも色んなキャラの出演を予定しております。

そ・し・て!!

原作KARASより、ある人物の出演が決定しました!!

何人なのか、誰なのかというのはここで話すのは想像する楽しみを奪ってしまうと思いますので、伏せておきます。

次の幕間で顔見世と行きますので、少々お待ちを。

さて、これからの投稿ペースですが、可能な限り1週間に1回、出来るなら2回程程度のペースで行きたいと思っています。

霊夢「ちょっと」

え？ あ、なんでここに？ 今回の後書きは私だけのはず。

霊夢「何だから知らないけど、凄くむかつくことを言われた感じがしたのよ」

そ、そうですかね？ いや、誰もいつてないとおもいますが。

霊夢「ふうん……そういうことみたいけど、どうなの、萃香」

なにに！？ ぐあっ！？ と、突然背中にも重みが……！！

萃香「いやいや、まさか、作者があんなことを考えていたなんてね。

これはしてやられたよ……これは、御仕置き、してあげないと」

霊夢「へえ、どんなことを言ったのかしら？」

萃香「それがね……」

霊夢「へえ……そんなことを」

あ、ちよ、ちよっと、待って。待って下さい。そんな、どこからと
もなく御札と鉄球が二人の手に、あ、あつ、針！？ 針はやめて！？
あ、いや、ちよ、ま、まつ、アツーーーー！！！！

幕間乃弐 華は舞う。太陽の下で。

ざわざわと、花が揺れる。それが、彼等の言葉であるかのように。
ざわざわと、風が震える。彼らの言葉を、その身に乘せるために。
——望まれぬ侵入者に、警告の言葉を伝えるために——

一面の花畑。太陽の花、向日葵。

一夏だけのその輝きのためにそのすべてを注ぐ、はかなくも力強い
その姿。

何でもない一場面だったなら。何のしがらみもなくこの地を踏めた
のなら、その美しさに息をのみ、見惚れ、賞賛の声をあげただろう。

だが、今、この時にあって、それは何の意味も持たなかった。

踏みしめる足が、次代の種を砕こうとも、触れた茎がその力を失お
うとも。

二つの足音は、歩みを止めることなく進んでいく。

音もなく、風もなく。ただ、その歩みを見つめるたくさんの“眼”
に気付くことなく。

太陽の花畑の中において、一つの異常点。

本来なら、ここにも、周囲と同じくたくさんの向日葵達が生い茂っ
ていたのだろう。

だが、そこだけは。その場所だけは、かつてそうであつたと予測することが困難な程の更地と化していた。

範囲は半径にして5メートル程度と、突然できたにしては不自然すぎる窪みだ。

まるで、そこに隕石が落下してきたかのような——というのは誇張が過ぎるかもしれないが、似たようなことが起こったのかもしれない。

底を見下ろす影が二つ。

一人は、女。一人は、男。

女の背丈は150を超えた程度だろうか。小柄な上に猫背であるためか、見た目以上に小さい印象が強く、更に身体そのものも細いためか、非常に華奢に見える。

肩口に届く程度の銀色の髪は本来ならば艶やかであるはずだが、手入れを怠っているのか、本来の輝きは薄れ、くすんでいる。視力の問題など何処かに置いてきたのか、前髪も瞳が隠れるほどにまで適当に伸ばされ、本来の手入れをすれば十分に見目麗しい顔立ちも、台無しのモノとなってしまうている。

隣立つ男は、20代前後とおぼしき風貌と、中肉中背——身体付きも、鍛えているとは思えないが、かといって痩せすぎてもいなければ、太りすぎてもいない。取り立てて特徴がないように見えるが、その瞳は今、この場所がどこであるのか、なぜここに自分がいるのかすらも理解しているとは思えない——まるで魂そのものを抜かれてしまったかのように濁り、淀んでいた。

この場所が“この地に住まう者”にとって、どれほど危険な場所か、知らないはずがないというのに。

女性は白いロングコートらしき上着のポケットから何かを取り出し、底にあるものを交互に見比べる。

「ハあ、間違いないわね。こんなとこに来てたなんて……ケど……ここから何処に？」

ここでは、彼女の所持している物のほとんどが役に立たない。位置を特定することも不可能。“アレ”は、必ず取り返さないとイケないというのに……下手に動くと拙いことになる。ここでは、あまりにも目立ちすぎるのだ。

もしかしたらもうすでに気付いているのかもしれないが、その時はその時。全てを疑ってかかっていたらきりが無い。

「アは、でも、いい臨床例ができたシ、無駄足では無かったかも……ねエ？」

ぐりん、と奇妙な速度で首を真後ろに回し、控えるように立っていた男に眼を向けるものの——そこから帰ってくる反応はない。

最初からそれを期待していたわけではないので、さつさと顔を正面に戻——す、その前に、耳障りな戦慄きが聞こえてきた。

ざわざわ、ざわざわ、ざわざわと。

太陽をつかさどる花畑そのものがまるで唄を歌っているかのように、揺れる。

意思を持っているかのように、震える。

突然自分たちの中に侵入してきた外敵を警戒するかのように――
斉に、その中心へ“顔”を向ける。音などない。ただ、見ているだけだ。

異物を。

異常を。

異質を。

ここにいてはならない存在へ向けて、無形の警告を発する。

『消えろ』と。

苦々しい物をかみつぶしたかのような表情で彼女は自分を中心にくるりと回る。

数歩、横に、後ろに、前に、動きまわる。

「ヒマワリ……力あ、嫌な花」

どれだけ動いても、どれだけ見ないようにしても、彼等は決して“視線”を外さない。

ここに入った時から感じていた、妙な力。もちろん、花そのものが“力”に分類される物を持っているわけではない。彼らが帯びているモノ。彼らが加護を受けているモノ。人間には決して持ち得ることのない“力”。

敢えて言うのなら、この花畑そのものが“力”によって成り立っているといっても過言ではない。その質はわからないが、見渡す限り続くこの花畑全体に力を及ぼすことが出来るとなると、よほどの大妖怪でなければ不可能だろう。

花畑の主と出会う前に目的を果たそうと窪みの底へ足を踏み出し――かけた刹那、その足首に、花の莖らしきものが絡みつく。

ひとつ。ふたつ。みつ。よっつ。

何が、と判断するよりも早く、次々に、きっかけを求めているかのよう集合し、束ねられ、その動きを封じようと殺到する。

無表情で、ただその場にいただけだった男は、動きを封じられようとしている彼女からの視線を受けたことで、ようやく救助と言う行動を開始しようとしたその時、突然全ての事象が停滞した。

空が、空気が、音が、世界が。

そのすべてが、己の役目すら放棄してただ身を凍らせている。

「あら、私の花畑にどんな御用向きなのかしら。今日は来客の予定はなかったと思うのだけれど」

凍りつく世界に、更に凍てつく声が響き渡る。

土を踏みしめるヒールの音が、その存在を主張することなく、耳に届く前に消え失せていく。

「……そう。勝手に入ってきたのね。許し難いわ」

花が、向日葵が、まるでモーゼの如く左右に割れる。

一歩ずつ、一歩ずつ。近づいてくる。

赤と黒のチェックスカートを風になびかせ、日傘を差し、照りつける太陽の輝きに眼を細めながら。

風見 幽香という、この花畑の主がその姿を現した。

「弁明と釈明はあるかしら？ あったところで結果は変わらないけれど」

ウェーブがかかった深緑の髪を優雅に揺らし、全てを見下す深紅の瞳が、己が領域に入り込んだ無粋な侵入者を射殺さんと輝きを増す。空間が歪む音——そんな物が存在するとは思っていない。存在だけで、そこにいるだけで全てを支配するような力があるなどという世迷言を信じているわけではない。

だが、しかし。それでも。

その美しさと、隠しようがない危うさが。五感のすべてを通じて伝えてくる。

彼女は危険だ、と。

「なぜ、どういう理由で、ここに入り込んだのかを洗いざらい話さない。それなら、形だけは留めておいてあげるわ」

絶対者にだけ許される言葉。しかし、それが間違いではないことをその瞳が、その意思が、殺意が、明確に伝えてくる。

答えを間違えれば、待っているのは圧倒的な力による蹂躪だけだと。そこに入る情け、躊躇、手心などと言ったものは存在しないのだと。

数メートルの距離を開け、視線が交錯する。

こういうタイプには、こちらの心情を悟らせてはいけない。仮に怯えていることが分かっしまえば、その後どんな形で取り繕おう

とも何の効果も無くなってしまふ。

いざとなれば、隣にいる者を置いていけばいい。試運転もなにもないが、捨て石程度の効果は果たすだろう。

ならば、後は――どれだけ欲しい情報を引き出すか。引き出せるかどうか。どちらにしろ、やるしかない。

「アぁ……それは御免なさい。知らないバケモノに話すなってママに言われているノ」

言葉の内容よりも、自分を目の前にしてそれだけの冗談を言えることに驚きを覚えつつ――更に歩を進める。

「その服装……外来人ね？ 迷うにとしてはすっかりとした歩き方だったみたいけど……“彼”の関係者かしら？」

「ハぁ……“彼”？ 何のことを言っているノ？」

「とぼけても無駄よ。貴方達の会話は、全てこの子たちから聞いたわ。明らかな意思を持ってここに来たことも、全部、ね」

近くに生えていた向日葵に手を差し伸べると、まるで花そのものか意思を持っているかのように、微かに揺れる。それに合わせ、周囲の向日葵が――一斉にその“顔”を二つの異物に向ける。明確な意思がないはずなのに、ただそこに咲き乱れているだけの存在が、一斉に自身を認識したとすれば、それは並大抵の恐怖ではない。

「ソウいうこと……そういう力を持っている……妖ということ」

この花畑に入り込んでから感じていた奇妙な違和感は、これだったのだ。どうやったのかはわからないが、自分たちのテリトリーに入

り込んだ異常を主に知らせたのだろう。

「ネえ……その“彼”は今どこにいるの？ 教えてくれない？」

「……もう、忘れたのかしら。全てを話すなら、形は留めてあげら
つて」

腹の底から響く声ではない。その言葉に込められる意味は——最後
通牒。

元々、この風見 幽香という妖怪は、自身が認めた相手にしかまともな対応をしない。認めていない相手に対しては、徹底的に無視するか——あるいは、排除するか。

もはや戦闘——と呼ぶに相応しいものになるかどうかはわからないが、そのことを避けられないと覚悟を決めたのか、それとも諦めているのか、最後通牒を聞いた後も感情の読み取れない——前髪の間から、深海の底に漂うかのような蒼い瞳が、目の前に立つ幽香を見つめていた。

ごぼり、と濁った何かが蠢く。

何かを叫ぼうと、何かを砕こうと。蠢く。

「“彼”をどうするつもり？」

ああ、お願いです。

考えうる限りの、想像できる限りの、その中で一番。

一番。そう、何の躊躇いも浮かばないくらいの。

——殺すに値する言葉を目の前の妖がほざいてくれますように——

「——聞いてどうするの？ どこの誰だか知らないけれど、彼は私のよ。他の誰にも、渡すつもりはないわ」

「ソウ。あなたも、そうなんだ。アは。あハ、ハア、あはははハ！！ ミンな、みいんな！！ そうなノ、ね！！ ダめ。だあめ。それはだメ！！ そんなの——許せるわけがないじゃな、イ！！」

ダメだ。この女は、ダメだ。

消さなければ。殺さなければ。消滅させなければ。必ず障害になる。必ず邪魔になる。

妖はやはり害虫だ。存在させておく道理など微塵もない。この目的を邪魔する存在であるのなら、立ちふさがる者がたとえ神だろうと閻魔だろうと——。

その全て、混沌の底に叩き落としてくれよう。

「消えなさい、化け物」

まるで口裂け女の如く、口の両端を邪悪に釣り上げ——そのだらりと下げた右手に握られていた“眼”がその瞼を開き——、白衣の女性性が、それを隣立つ男の背に叩きつける。

「——ッ!」

瞬間、感じた力の波動から背後の花達を守るために日傘を展開する。数秒、あるいは数十秒か。放射される力を凌ぎ切った幽香の日傘は、まるで炎に焼かれたかのようにその身を裂かれ、姿の残りがすが未練を残すように足元で燻っていた。

傘の隙間——というには広すぎる、もはや塞ぐ者がなくなった視界に入り込むのは、人の型に武者の鎧を埋め込んだ、“何か”に成り損ねた殺意だけ。

歪、という文字しか、その存在からは感じ取れない。何の変哲もない、ただの人であつたはずのその男の体は、その大半が赤黒い鎧で覆われ、姿だけを見れば、荘厳な武者のようにも見えなかもしれない。

だが、二の腕には中途半端に鎧が埋め込まれ、肉が避け、その中に在る骨すら見え。

装着する時に不備が出たのか、両足の脛脛から下は完全になくなり、中身が空っぽの足甲がその体を支えている。頭蓋を覆うはずだったフルフェイスの兜は“ズレ”てその半分しか宛がわれていない。

唯一の武装と見て取れる刀は右腕と融合し、まるで、腕の中からそれが映えているかのようにも見て取れる。

鎧と重ならずに残った眼が、何も移すことなく幽香へと注がれる。

力の放射が収まるまでの間に、もう一人の女性は逃げてしまったらしく、どれだけ目を凝らしても、その姿形を見つけることはできないが、この殺意の塊のような置き土産を置いていったことから考えると、こちらを殺したいと思っっているのは間違いないらしい。

目の前の存在を通して、背筋がひりつくほどに感じるのだ。

殺意そのものと言つべき“意思”を。

「貴方自身に、興味はないわ」

なぜ、彼がこうなったのか、想像をしたところで何の意味もない。経緯はどうあれ、彼はこうして自分に殺意を向けている。話をする気がないのならば、できないのならば、せいぜい呪ってもらうしかない。こうなってしまったことを。

「けど、貴方が折った花達の代償は受け取ってもらつわ」

無言で、“もどき”が一步を踏み出す。叩きつけられる殺意が、久しく蓋を開けていなかった、妖怪の本能という器を存分に刺激する。

「お気に入りの日傘も壊してくれたし——」

歩みが、その速度を増していく。20メートル近い距離があったはずのそれは、彼の一步で刹那の間に踏みつぶされ、消失。

瞬く間に零の距離となり、懐に入り込んだその眼前にあったのは。

堅く握りこまれた拳と。華が開いたかのような——真っ赤な笑顔。

「丹念に、潰してあげるわ」

振り下ろされる破壊の一撃が、全てを飲み込み。
そして始まる、舞闘遊戯。

華麗に、花々しく。

互いに死を届けるためにだけに。

——さあ、踊れ。その心のままに——

幕間乃式 華は舞う。太陽の下で。（後書き）

幽香「……あら？　今回は私？　まあ、いいわ。出番もあったことだし……気分が　　いいからやってあげる。有難く思いなさい？」

妹紅「んで、なんで私がこいつの相方を務めなくちゃならないんだ」

幽香「あら、文句があるの？」

妹紅「本編で私の出番がないから、まあ、いいけど。えーっと、今回の話は幽香サ

イド……幕間、なんてついてるが実際の位置づけとしては本編、つまりは主　　人公の守人が動いている間、幽香が何をしているか、っていうことだ」

幽香「時間軸としても、幕間の前の話とほぼ同軸の時間上の話にしているようね」

妹紅「これはあんまり離れた時間になると、混乱してしまうかも……作者本人が、

ということからきたものらしい。懸命だな」

幽香「今回新しいキャラが出てきたけれど……このキャラは全編を通して鍵となる

みたいね。名前や出自はまだ先になるみたいだけだ」

妹紅「で、本来なら次は守人サイドに戻って第八話……と行きたかったらしいが、

次もこの話の続き……正確には、今回の話に関係する話にな

るらしい」

幽香「あら、どうして？」

妹紅「色々と書いている内に、話が長くなりすぎたと。色々考えた結果、分割した

方が読みやすいんじゃないか、と至ったみたいだな。話そのものはある程度

出来あがっているから、近いうちに投稿するみたいだぞ」

幽香「そう。こんな駄文をどれだけの人が楽しみにしてくれているかわからな

いけど、せいぜい言ったことくらいは守ることね」

妹紅「作者にしてみれば、後書きでの約束の通り、一週間以内に投稿できたことに

胸をなでおろしてるみたいだな。自分の執筆速度と相談してきめればいいのに」

幽香「近いうちにまた私が出るようね。ふふ……気分がいいわ」

妹紅「……こっちはほったらかしだったのに……ま、そういうわけだ。蘇生途中

の作者に代わって、私、藤原 妹紅と」

幽香「風見 幽香が後書きを担当させてもらったわ。じゃあ、次話を楽しみにして
いなさい」

間話 とある大きな木の枝で

「大したもんでやんすね……あの妖の女性は」

太陽の花畑から遠く離れた山の中腹。視線を遮る物のない木の枝に腰かけ、遠く繰り広げられている戦闘を眺める男が、一人。

ドレッドヘアーを幅の広いバンダナでまとめ、サングラスをかけ、両耳にはいくつもピアスが日の光を受けてきらめいている。

タートルネックのアンダーに襟の大きいジャケット。濃紺のジーンズに革靴。背中にはギターケースと思われる物。

もし、これが“現代”と呼ばれる世界であつたなら、彼は少し勘違いをしたロックバンドのメンバーとも見て取れただろう。

違うのは、その纏っている気配だろうか。数百メートルは離れているであろう光景を見る視力もそうだが、繰り広げられている戦闘を見ても全く動じない。

「ええと……風見 幽香さん、でしたかね？」

首をそのままにして呟く。

「そうだけど……ねえ、何をするつもりなのよ、あんた。どうしても、っていうからここまで案内したけど。あーいうのには関わらない方が身のためよ？」

隣の枝に座る少女。黒いワンピースに黒いニーソックス。黒いショートヘア。顔立ちは見た目はまだ中学生程度の美少女と言える外見

だが——その背に生やしている3対6枚の抜れた羽根が、人ならざる者であるということを証明している。

手に持っている三又の銚を肩に担ぎながら、同じ方向を眺めている同行者に忠告する。

「あつしとしても……そうしたいところですが」

「ならどうしてよ？ あんたの話が正しければ、いわゆる仇敵つてやつでしょ。そんな奴のためになんで動くの？」

その言葉に、かつての記憶がよみがえる。言葉を交わした回数はたかが知れている。

そこには友情などありはしなかったし、逆に、憎しみだけがあつたこともある。

けれども。その最後で。本当の最後の最後——最後の願いを聞き届けてくれた“彼”は——間違いなく、友と呼べる物だったと、今なら思える。

その“彼”はここにはいない。しかし、自分がすべきことを任せてしまった借りがある。

同じ“彼”ではないが、その借りを返すことこそ、今、自分がすべきことなのだと思う。

「……恩返し、って言ったら、笑いやすか？」

からかうような口調とは裏腹に、その視線は真摯な光を宿していた。なぜそこまでこだわるのか。そこについて聞いたところで、話してくれるかどうかはわからない。

知りたい、という欲求はある。しかし、そこまでしてもいいのか、という想いがブレーキをかけてしまうのだ。口をつぐんだ彼女を見て、軽く肩をすくめると、身体をほぐしながら身体を起こす。

「そろそろ、向かいやしようか。案内、ありがとうございした…僧侶様には、少々遅くなると伝えてくだせえ」

二人の会話の間にも、太陽の花畑で繰り広げられている戦闘は、終息の兆しを見せ始めていた。

「……せいぜい、気をつけなさいよ。うっかり殺されても知らないから」

「御心配、痛み入りやす」

バランスの悪い足場で丁寧に頭を下げると、音もなくその場から飛び立つ。

駆けていくその後ろ姿を見届けながら、なぜか、その場を動く気にはなれなかった。

自分と同じ種族であり、自分と同じ字を持つ。それだけであつたはずなのに。

なんで、自分はこんなことをしているのだろうか。こうして彼の手助けをすることで、何かが変わるわけではないはずなのに。

「——馬鹿みたいじゃん、私」

ぽつり、と呟いた言葉は、誰にも聞き届けられることなく、虚空へと吸い込まれた。

間話 とある大きな木の枝で（後書き）

短かったので連続投稿となりました。もはや何代目かわからない作者の茨陸號です。

今回は、K A R A Sを知っている方なら即座に気付きますでしょう、あの人が出てきました。同行しているのは……僧侶様、ということから多分察していただけだと思いますが、正体不明なある少女です。今現在、彼はあるお寺にてお世話になってます。そこに至る経緯なども少し考えてはあるのですが……書いてほしい！ 書けコラ！ という要望があれば、やんわりと感想などに書き込んで下さい。多分、書くとしたら彼の観点からの御話になるので、本編とは別に書くことになると思いますが……。

彼と彼女をペアにしたのは、まあ、名前からですな。同じ種族であり、同じ字を持つ……東方の彼女と、K A R A Sの彼が本当に”同じ”なのかは別として。義理と人情を重んじる……と私は思っている彼と、イタズラ好きでその場で動きそうな彼女。デコボコのコンビかもしれませんが……やんわりと見守って下さい。

さて！！ 次の御話は……みなさんお待ちかね！！

奴の活躍が満載の御話！？

幻想郷最強の怪獣！！ 砕ける物は微塵に砕く！！ 神も悪魔も殴って散らす！！

風見 ゆ……

??「あら、誰のことを言っているのかしら」

う……

??「出番を増やしたから見直そうと思っていたのだけど……いらなかったみたいね」

……

??「私が怪獣なら、それらしく……」

??「丹念に、潰してあげるわ」

あ、あ、A A A A A A A A A A ! ! ? ! ? ! ? !

幕間乃参 華の戦舞。交わる妖

振り下ろした拳がむき出しになった生身——ではなく、兜に覆われた顔を捉える。

ボクシングで言う打ち下ろしの右——堅く、尖った感触が拳に伝わるが、意に介することなく、全身の力で振り切る。単なる打撃だが、こと風見 幽香が放てば、それは実に簡単に必殺の意味を持つ。

本来ならば、十分な防御の役目を果たしていたであろう強固な兜がその衝撃にあっさりと白旗をあげ、ひしゃげ、潰れ、お互いがぶつかり合う形であったためにカウンター気味となったその一撃をまともに受けた鎧武者を地面に何度もたたきつける。

叩きつけた地面がその衝撃を殺しきれず、悲鳴のような地割れを刻まれる。反動で跳ね上がったその足を幽香が掴み、全身の力で持って振り下ろす。

成人男性の体重、加えてその鎧の重量を考えれば、ゆうに100キロは超えているであろうそれを、片手で軽々と振り回せるのはやはり妖怪であるゆえか。

叩きつけるたびに肉と内臓が潰れる嫌な音が聞こえる。更に叩きつけようと振り上げた瞬間、幽香の手が離れ——直後、その場所を刃が通過していく。

振り上げられた勢いのままに放りだされた身体は投げ飛ばされ、受け身を取らぬままに地面に激突する。手足が擦れた格好のまま地面を転がり、その途中、腕を地面にたたきつけて強引に体勢を戻すと、両手を地面に突き立てて勢いを殺し、顔をあげた瞬間——麗しき足

刀がその首ごと地面から引き離す。

顔に張り付いたままの微笑は一切崩さず、風で靡く髪を抑えながら吹き飛んでいく武者もどきを優雅に眺める。

女神と言うに相応しい美しい微笑なれど、それを一つめくれば、そこにあるのは敵対したものを全て紙砕く殺気と殺意があった。

隠すことなどしていない、混じり物など存在しない、純粹で純然たるその殺気に充てられたか、吹き飛

んでいるさなかの空中にあって、身体を捻り、頭と足の位置を入れ替えると、その足元に魔法陣に似た円形一枚絵が浮かび上がる。

それに足が触れた瞬間、弾かれるかのように、そのベクトルが切り替わり——有り得ない速度で再び刀を構えて突進する。

みてから回避が間に合うような速度ではないにも関わらず、幽香は僅かに体を半身にただけでその切っ先から逃れる。

回避されたということを認識し、両足での急激な制動と同時にその場で回転し、右腕の刀を、彼女のその心の臓へと突き立てるべく振るわれる。

踊るが如く。

舞うが如く。

雨霰と。豪雨の如く降り注ぐその斬撃は人の放つことができる速度をとっくに超えている。

だが、その内一つとして、優雅に足踏をする華の女神に触ることすらできない。

彼女自身は、その場からほとんど動いていない。相手の動く先を読み取り、その体勢からもつとも反撃しやすい軌道から自分をほんの少しだけずらし、結果として簡単に回避しているように見えるのだ。

半ば操られたかのような目と動きから予測を立ててみたが、どうやら間違いはなかったようだ。この男は元々人里の人間ではあるが、かつて見た様子から考えても、普通の農民と言った風体で、とてもではないがきつちりとした戦闘に関する訓練など受けていない。そんな人間がこれだけ動けるということは、あの女が埋め込んだものが何かしら関係しているのだろう。ずぶの素人を、少なくとも見かけだけは戦えるように出来るとなると——それは一体、どんなものなのか。

彼女が首を左へと僅かに傾げた直後、その残像を追うように刀が虚空を貫き——その手首を、幽香の左手が掴み——単純な握力だけで握りつぶす。更に捻る。擦じって体勢が崩れると同時に関節を決められる形となった男の左腕、その肘に掌底が叩きこまれ——あつさりへとへし折れ、凄まじい衝撃に耐えきれず骨が肉を突き破り、大量の血液と共に地に落ちる。

本来ならば、普通の人間ならば、右腕がこれだけ壊されれば間違いなく立っていることはできない。痛みには呻き、悲鳴をあげ、のたうちまわり、果てには気絶をするだろう。

出血量によってはそのまま死ぬ可能性すらある。だが、それでも反撃——使えない右の代わりに逆の腕が振るわれる。まだ無事であるはずのその握りこまれた拳も、彼女の服に触れることすらできない。ターンをするかのように回避した動きのまま、振り下ろされた左腕の外に回り込み、その腕を、挟まれたらその感触だけで卒倒するであろううおみ足でひざ裏に挟み込み——あいた右手で武者もどきの頭

蓋を鷲掴み、地面にたたきつける。

そしてそのまま——叩きつけた姿勢、頭蓋を掴む右手を離さないまま駆けだす。

跳ね上がりそうになる武者もどきの頭を押さえつけ、その顔面で地面を抉り、十数メートルを駆け抜け、そのままの勢いで遙か上空に投げだす。

急激な制動をかけた左足が土煙を巻き上げ、その足を軸に身体を独楽のように回転させる。突進の勢いが遠心力に転化され、跳ね上げた右足は——落下してきた武者もどきの背中を痛烈に撃ちすえる。鎧の防御力など紙の様に。圧倒的な“力”によって全てを砕き、破壊し、蹂躪し——蹴り飛ばす。

もはや、まともな受け身など取れるはずもない。地面に何度もバウンドし、勢いを殺すことすらできずに無様に転がる武者もどきを眺めながら、振り抜いた足をゆっくりと下ろす。

手応え……この場合は足応えか。帰ってきた感触は、人間にとっての根幹となる背骨を完膚なきまでに破壊する、致命傷となるものだった。全力では無かったとはいえ、十分に意識を断ち切るだけのものであったはず、だが——。

「丈夫ね……いえ、丈夫にさせられているのかしら？」

舞い上がり、崩れた髪を手で押さえながら、一歩ずつ、標的へと歩み寄る。

優雅に、だが、極大の威圧感が迫ってくるのを感じたのか、まるで糸の切れた操り人形の如く、あるいは、捕食者から逃げようとする獲物のように。

すでに右腕は使えず、立ち上がったところで、今までの戦いからしてみれば戦意を喪失していても何らおかしくないのに。

何かに取り憑かれたかのように、戦うことをやめようとしな。

無様、としか言いようがないその姿を見たことで、途中まで昂っていたはずの心がここにきて一気に冷めてしまった。

手負いの獣は恐ろしいとよく言うが、目の前にいるのは獣にすらなることもできず、人としての力もない、ただの成り損ね。もはや、これ以上長引かせても何の意味もない。

多少なりと運動になったということだけしか残らないことが、酷く苛立つ。

立ち上がることができずに膝をつき、まるで赦しを乞うかのような体勢の彼の前に、幽香が立つ。

恨みはないし、散々殴り飛ばし蹴り飛ばしたことで、花を痛めつけてくれたことに対する溜飲は下がった。目の前にいる男に、これ以上の価値を見出すことはできない。

この人間に対して、さしたる感情こそ持ち合わせていないが——これ以上、無様な姿をさらさせていても仕方がない。

「……さよならね」

慈悲などなく。容赦も躊躇もなく。ただ一振り。その振り下ろされる拳、全てを絶つ一撃によって、この戦いはあつけなく終わりを告げた。

——そう、終わりを告げる“はず”だった。
拳の軌道に割り込む、一筋の銃弾さえなければ。

止めた拳——瞬きほどの時間の隙間。その間に、再び聞こえる銃声。しかし、彼女は動かない。先ほどの銃弾も、そして、その直後の物も。そのどちらも、殺意も殺気もなく放たれたものだった。しかし、解せない。

一度目は明らかにトドメとなる一撃を防ぐ目的だったにも関わらず。

二度目は逆に庇った筈の武者もどきを狙ったものだったのだから。

銃弾を受けた男がゆっくりと倒れていくのを視界の端に捉えながら、最後の最後に邪魔をしてくれた無粋な乱入者を睨みつける。

「いやあ、お強いですねえ……もう少し遅れていたら危ないところでやした」

金色の銃を両手にぶら下げながら、緊張感の欠片もない、抜けた声で戦いの舞台に割り込んできたのは、ドレッドヘアを幅の広いバンダナでまとめた、見たことのない衣服に身を包んだ人間——いや、「匂い」が違う。見た目は人間そのものではあるのだが。

うつすらと笑みを浮かべ、まるで親しい友人に会いに来たかのような軽い足取り。その胆力には流石に驚かざるを得ない。

「妖怪……けど、あなたみたいな妖怪は見たことがないわ。……外来の妖怪、ということかしら？」

風見 幽香という妖怪が、自分の戦いを邪魔した存在を即座に排除しなかったのは、その匂いをかぎ取ったからだ。でなければ、邪魔をした存在ごと全て消しているのは間違いなかっただろう。もっとも、彼にとってみればそれはないと踏んでの行動だったのだが。

「私の手を止めさせておいて、自分でとどめをさすなんて……この男に恨みでもあったのかしら？ それとも……」

「いやいや……人間様を手には掛けるなんざ、恐ろしくて、とても」

「……？ 何を言っ……」

態度はともかく、口調が真剣だったので、思わず倒れ伏している男の方へと目を向けると、そこにいたのは、先ほどの鎧が外れ、怪我の痛みで呻く男の姿だった。

一体、どういふことなのか。あれだけの攻撃を受けて生きていることにも驚きだが、なぜ解除されたのか――それが、分らない。驚きに言葉を失っている幽香を横目に、ドレッドヘアの男が横切り、倒れ伏している人間の傍に落ちている手鏡のようなものを手に取った。

「これが、手品の種でさ。見ていたでしょう、白衣をきた人がこれを使うのを」

「覗きをされるのは好きじゃないわ。長生きしたければ慎みなさい」
そういえば、あのスキマ妖怪もいつか殴らないといけないわね。と呟いた。

なるほど。一度目の銃撃でこちらの動きを止め、その隙に二度目でこの装置を撃ち抜いたのか。何処から見ていたのかわからなかったことと、ワンチャンスでそれを行った技量といい、相応に警戒する必要が在るのかもしれない。その目的も含めて。

「それは……失礼しやした」

「それで……何のつもりでこんなことをしたのかしら？　ただ、この男を助けるため？」

「いえ……ですが、少々お時間をいただいだけやせんか？　この人をお寺に運びたいんで」

助けるつもりなのだろうか。まだ、生きてはいるが、相当な重症だ。全力ではなかったとはいえ、幽香の攻撃を受け続けたのだ。

「駄目ね。先に話さない。その男が死のうが生きようが、私にはどうでもいいの」

「……」

その発言には、流石にドレッドヘアの男も顔がこわばった。

風見 幽香にとって、この男はその程度の価値しかない。無論、相応の力があればある程度の敬意——に近いかはわからないが、それなりの対応をするが、この男にそれを見出すことはできない。

妖怪としては、別段不思議な発言ではない。助ける義理もなければ、救う使命もない。

特に、彼女にとっては。

「私が運ぶわよ」

二人の会話に割り込んできたのは、黒いワンピースと三又の鉗、尻尾に曲がりくねった不思議な羽。黒い髪に赤い瞳——。

「……貴女、確か、あの僧侶の所の、ぬえ、だったかしら？ 今日 は千客万来ね。でも、此処に入ることを許可した覚えはないのだけ ねど？」

「ふん。あんたには関係ないでしょ」

お互いの言葉はかなり刺々しい。と言っても、お互いを憎んでいるとか、嫌っているとかと言うレベルではなく、現在の状況が影響している部分が大きい。

加えて、幽香自身、あるお寺の総大将の唱えている理想が気に入らないのだ。

「いいんですかい？」

「一応、私もあそこに世話になつてる身だからね。助かるかどうかはわからないわよ」

中学生ぐらいの少女に見えるとはいえ、流石に妖怪、自分の体重の倍はあるであろう成人男性でもあつさりと肩に担いで空に浮かぶ。

「ありがとうございます」

二人のやり取りを耳に入れながら、幽香の視線は先ほどから男の手の中にある手鏡に集中していた。

彼は手品の種と言ったが、よくよく見てみれば、その質感、形状共にあの刀の鍔元に在った“眼”とよく似ている。

あの時ほどの力を感じることはないが——あの武者もどきへと転じた瞬間のその力は、今考えてみれば似通っている部分も多分にあるだろう

ぬえが男を担いでこの場を離れるのを待ち——改めて、お互いが向き直る。

交錯する視線と、お互いの思惑。

それが、何を生み出すのか——何を紡ぎだすのか。

「じゃあ、話してもらおうかしら。その手品のタネのことを、全部、ね」

幕間乃参 華の戦舞。交わる妖（後書き）

ちよつとだけ遅れました。すみません。作者の茨陸號です。

改めて投稿する時になって、色々な修正点があり、それを直していたら遅くなつてしまいました。

えと、今回は幽香様の戦闘シーン！！ なんです、書いてて途中で思いました。

マジ肉弾戦。ぐらつぷらー幽香。弾幕の「だ」の字もない！！

どうしてこうなつた。

えつと、色々と言いわけを……華麗なる弾幕を期待していた方にはお詫びを。

なんといいますか。弾幕はあくまで真剣な遊び、という解釈でいます。相手を殺めるなんてことはまずありませんし、憎しみでどうこうということも、まずありません（とある不死鳥&とある姫様は除く）。

原作東方でも、男の人は弾幕をしませんし……まあ、これは描写をされてないだけで、使える人もいるのかもしれないが……細かいことにはあまり突っ込まないで下さるとうれしいです。作者のハートはガラス細工なので。たぶん。

今回はそもそも、遊びの範疇を超えています。なので、幽香様も最初から全開で妖怪をしています。

それで、これは個人的な解釈になつてしまつのですが、幽香様は純粹な高い妖力と身体能力を備えた妖怪らしい妖怪ということで、そ

の力が強すぎるために、特製日傘を使って出力を調整しないと、ブっぱなし状態になってしまっ、という風に考えています。今回は戦いの舞台が自分のホームグラウンドなので、周りに被害を出さない為に肉弾戦を選んだ、という形ですね。

さて、次は……ようやく本編に戻ります。待つて下さっている方がどれだけいるかはわかりませんが、一週間以内には投稿したいと思っています。では!!

第八話 森の中の迷い子達（前）

人々が、突然、何の前触れもなく失踪する行方不明事件。それが今、この幻想郷において頻発していた。博麗の巫女ですら手に余るその事件を憂い、ここに、一人の探偵が立つ……！！

「ふむ、ここが犯行現場かね、わとそんくん」

「ああ、此処が犯行現場だが。わとそんくんとは誰だ。ついでに言えば、その妙な帽子とパイプと口ひげと外套はまったくもってにあつていないぞ」

「……あれ、似合つてない？ 結構イケてると思つてたんだけど」

早々のボケをあつさりと潰され、若干名残惜しそうにしながらも探偵ルックを脱ぎ捨てる。あの兎耳の少女なら、なんやかんやとリアクションをとってくれるのだが。

慧音は美人には間違いないが、少々堅すぎるようにも思える。

もう少しボケに付き合つてくれるとこちらとしても楽しいのだが、まあ、ここで失踪したのが人里の人間だということならば、仕方ないことかもしれない。

人里の外れの外れ、ある奥深い森の中…… 昼間だというのに太陽の光はカンカン照りで、真つ暗ということもなく、まったく怖くない。雨が降っても乾き切らないのか、多少じめじめした感覚はあるが、その程度だ。

「見事に何も無いけど……なんで人里の人間がいなくなったってわかったんだ？」

森の中、周りは茂み。雑草が生えてはいるが……手を加えられた様子もなければ、妖怪に襲われた時に抵抗した跡なども全くなく、周りの草木も損傷の形跡はない。日数が経過しているためか、妖怪の気配も感じられない。

「ここでいなくなった里の男——与作というが、彼が履いていた履物が見つかったのが一番の理由だな。もちろん、何処かへ運ぶ途中に落ちただけかもしれないが、最も有力な場所には違いあるまい？」

「なるほどね」

見れば見るほど、何もない。痕跡らしき痕跡はやはり見当たらない。犯人は現場に戻る。そんな格言が何処かに在ったことは覚えているが、こと妖怪に関してそれが当てはまるかどうか。テリトリーがこの近辺ならいずれ戻ってくるだろうが。

あるいは。その落とされていた履物が、人里の人間ではなく、上白沢 慧音でもなく。

別の誰かに対するメッセージだとしたなら——その狙いは何になるのか。

誘う為の餌か。

それとも——？

仮に、河童以外の妖怪がこちらに来ているとしたら、その目的は。単なる“鴉”への恨みだけで行動するのならば、今の守人を狙うのが最も手っ取り早い。いくら人里の守護者が傍にいたとはいえ、“

鴉”へと転じることをできない彼を恐れる必要などない。河童はその辺りを悟らせる前に倒したが、あれから多少なりと時間が経過した。聡い奴ならば、ある程度の情報はあつめているだろう。ならば、なぜ。何もアクションを起こさない。

「——と、——りと——！」

思考の海に埋没しかけていると、誰かが声をあげながら大きく揺さぶってきた。

「お？」

「お？　ではない。どうした、いきなりぼけつとして。何か気になることでもあったか？」

「んー、気になることがないわけじゃないけど、どうだろな。ここだけじゃ、判断がしにくいかな」

音もなく、気配もなく。悟ることすらできない僅かな空気の流れ。いかな武芸者として、それを感じることなどできないだろう。二人を見つめる“目”が存在していることを。

「ふむ、ならば別の場所にも行くでしょう。あまり長居をして人里を留守にしすぎるのもよくない」

「あー、もこたんがさびしがってるかもな」

妹紅のキャラクターとはあまりにかけ離れた愛称に、慧音は思わず噴き出す。

「も、もこたんか。それぞれで……可愛らしいかもしれないな」

「さびしんぼもこたんだな。ああ見えて以外にさびしがり屋とみた」
なんとか笑いを我慢しようとしているものの、口元はひきつっているし、目元はうるんでいる。誰がどう見ても、爆発する一歩手前だ。その様子を即座に読み取り、守人は更に畳みかける。

「さらに新しいタイプのつんでれ……いや違う。あれはツンデレなどではない！！ 敢えて言うなら、さびしいのを隠しているから構ってけるとツンとしながらも嬉しくて尻尾を振ってしまう……言うならば、カマ（ツ）テ（ク）レ……！」

「ぐっ」

ついに耐えきれずに慧音は何かを噴き出し、咄嗟に口元を押さえる。

「そう、それはさながら飼い主に甘える子犬のように……しかし！ ツンと済ました子猫の様に……素直になれない心が見え隠れする……ッ！！ そこがまたいい！！」

「や、やめ……くっ……は、腹が……」

「そこで彼女にこういうんだ……」

ただ単に言葉を並べているだけならば何も流せるだろうが、言葉の一つ一つに絶妙なアクセントを入れ込み、右手を大きく振って大げさに、まるでバレエの演目の様に動作を行う。加えて、その顔が妙に大真面目なので……そのギャップと話の内容が咬み合わさって……慧音にとっては、凄まじい破壊力を生み出してしまった。

本来のキャラクターを忘れて大笑いしてしまいそうになるほどに。

「も、もりっ……やめ……」

「私を見捨てないでっ。もこたん……！」

「ぐっ……！！」

このようなやりとりがその後数分間続けられ……終わったところには、慧音はぐったりと木にもたれかかり、守人は何かをやり遂げたかのように右腕を天に突き出していた。

この光景だけをみると完全に意味不明である。

「……と、まあ、即興コントはここまでにして」
「……な、なんだと……！？」

あっさりと前ふりを蹴り飛ばし、真面目モードにもどった彼を見て、思わず驚愕の呻きが漏れてしまう。

「そろそろ行こうか？ これ以上ここにもあんまり得るものはなさそうだし」

「……はあ、確かに、その通りだな。なぜだろう。お前と話すと妙に疲れる気がする」

「ふふふ、それは忍耐力が足りない証拠ですな」

「私は十分に忍耐をしていると思うのだが……」

溜息と共に、踏み出す。もたれかかっていた身体を起こし、歩きだそうとしたその体が、がくん、と何かに引っ張られたかのようにつんのめった。

何が起こったのか理解できずに慧音は目を白黒させながら、未だ木の幹から離れていない自身の右手を見つめる。

ゆっくりと、掌へと視線を移す。そこに在るのは、不自然なほどに、不自然すぎるほどに糸を引く“何か”。

「なんだ、これは……」

それは、狩りのための手段。

それは、人が未だたどり着いていない物の具現。その一つ。

「――！」

それがなんであるか、気付いた瞬間、慧音の腕をとり、強引に引き寄せる。

突然のことに対応できないでいる彼女をおいてけぼりにして、胸元まで引き寄せると同時に背に括っていた刀を抜き、伸びきったところを狙って一気に振り下ろし、切断。

慧音を抱いたまま後ろに飛ばうとして、ようやく、周囲の状況が分かってきた。

「……あー、こりゃ、やられたか」

「な、な、ななな、ななな」

多少なりと、気配などに敏感な守人でも、風が吹けば飛んで行ってしまういそうな程の網を感知する術はない。

それでも、これだけやられて気付けないということは、どうやら思ったよりも――感覚的にもかなり消耗しているらしい。

「は、はな、はなはな、離してくれっ――！」

「そりゃ駄目だな。柔らかいし、いい匂いするし、気持ちいいし、正直、抱き枕にしたいくらいだ……けど」

「けど！？　けどなんだ！？　私は枕ではないっ――！」

周囲を見渡して、僅かに視線を動かせば、太陽の光を浴びて僅かに煌く極細の糸が幾重にも、幾重にも張り巡らされている。

まるで、森の狩人がこの時を待っていたかのように。守人の視線に、ようやく慧音も周囲の異常に気付く。

いつからだろうか。虫の鳴き声も消えている。鳥のさえずりも聞こえない。太陽すら、何かに怯えているかのようにその輝きを雲に隠している。

「これは……」

「間抜けにも、まんまと罠にかかったところだろうな」

しかし、場所が悪い。未だに刀を抜くことができないということは勿論、森の中というのが更に不利に拍車をかけている。

彼の所持している刀の長さは自身の身長に近い、かなりの長刀だ。もちろん、振り回せば鞘といえどある程度の打撃ダメージは与えられるだろうが、この周囲の状況では、振り回したとしても何らかの障害物に邪魔をされる。

スペースも少なく、そして、その少ないスペースも獲物を絡め取る蜘蛛の糸で潰されてしまっている。

「さて、と。こんなくそつたれな舞台を用意して下さったんだ。とつと出てこいって」

音が止まったその世界において、不思議とよく通る声で語りかける。その身の不利など全く意に介さず、知り合いに声をかけるような気軽さで。

しかし、語りかけに帰ってきたのは返事ではなく、僅かな森の嘶き。自分たちの上から降り注いできたその発生源へと目を向ければ。

「……ち、やっぱりか」

そこにいたのは、巨大な蜘蛛。全長でいえば6・7メートルはあるだろう。

その一つ一つが人の胴体ほどはあろうかと言う太さを持つ足と、頭部と胸部が合わさった巨大な頭胸部。本来ならば袋状になっている腹部は硬質の金属で覆われ、二人を覆い隠すほどにまできている。それだけでも十分に違和感を覚えるが――何よりおかしいのが、本来なら四対八本あるはずの脚が、蜘蛛、という存在を知らしめる上で最も重要なその脚が、半分、ない。まるで、二足歩行を可能としたかのように。

まるで、蜘蛛を無理やり人間の形におしこめたかのように。

どんな突然変異をしたらこうなるのか、学者の首を絞めて問い詰めたくなるほどに、馬鹿げた巨大さと、凶暴さ。

それは、この場所に有って、絶対的な捕食者として君臨していた。

その“眼”が、紅く輝く狂眼が、獲物を見つけ、捉えた喜びに鈍く煌いた。

第八話 森の中の迷い子達（前）（後書き）

??「映姫と」

??「小町の!!」

映姫・小町「後書きコーナー!」

映姫「さて、今回は私たちのようですね」

小町「映姫様、なんでまたあたいたちなんですかね。本編に出る予定もほとんどないのに。せつかくの昼寝タイムが」

映姫「小町、あなたはまた……はあ、どうやら、本編に登場するキャラクターだけではマンネリになってしまいそう、ということらしいわ。口調などに不備があるかもしれないけれど、大目に見て下さい」

小町「遅れた理由は……某俺のターン! なゲームの六番目をやりこんでいたから、みたいですわね」

映姫「……どうしても口を割らないと思っていたら、そんなことでしたか」

小町「あー、あそこで煙をあげてるのって」

映姫「当然の報いです。さて……今回も前後編になってしまったようです、あまりに長すぎる場合は今後もこうして分割することもある、と考えている、と言っていました」

小町「でもこれって……うまく書けない」まk

映姫「……さて、次の話ですが」

小町「誤魔化した!？」

映姫「この話の後篇ですね。戦闘シーンをメインにしていく予定の様ですが……別のオリジナル小説の設定も考えているそうなので、もしかしたら少し遅れるかもしれません。出来る限り1週間に1度というペースは守りたいと言っています」

小町「そういえば映姫様、あたい達の出番ってあるんですか？」

映姫「……さて、そろそろ仕事の時間ですね。小町、貴方も戻りなさい」

小町「あ、映姫様!？」

すたすたと足早に去っていく映姫。その後ろ姿を見ると、何かはらはらと落ちてきた。それを手に取った小町の顔が固まり、次に、口元が妖しく釣り上がる。

いつの間にか手には鎌が握られていて、何かに向かってゆつくりと歩いていく。

その後を追うように舞う紙に書かれていた言葉。それがいったい何であるのか、知る者はほとんどいない。わかるのは、その後、誰かの断末魔が響いたことだけだった。

幕間乃四 迫る天狗と蓬萊人

もんぺの裾が引つ張られる。ぺちぺちと頬が叩かれる。

髪の毛はくるくると遊び道具にされ、肩車をしたくないのに強引にされてしまっている。

留守番開始からわずか十分、すでに後悔しか胸の中に無い。

失念していたのだ。慧音が守人を連れて帰ったことは里の人間に知れ渡ってしまっており、どうやってもそれを収めることは不可能で。

外来人が来たとなれば、里の人間がそれを見ようと集まってくるのは明白で。大人達はともかくとして、興味がある物を見るためならばその力が三倍になってしまう子供たちを抑え込むことなど不可能。

つまり。簡単にいえば。

「なー、あのにいちちゃんは一？」

「せんせーは？」

「なー、もこーあそんでー」

「あははははー！！」

「あーん！！ あーん！！」

「くるくる」

寺子屋を駆けまわって遊ぶ子供。遊んでとせがんでくる子供。慧音と守人を探そうと色んなところをひっくり返している子供。

泣き出す子供もいれば、眠りに入る子供もいる。

つまるところ。すでに収集が不可能な領域に入り込んでしまっているのだ。これが。

「……」

とりあえず、黙っていればどうにかなると思っていたが、見通しが甘いと言わざるを得ない。人付き合いが苦手——というか、苦手意識を持っている妹紅としては、早いとこ色んなものが過ぎ去ってくれるととてもうれしいのだが……。

どうしたものか。と悩んでいると——妹紅の頬を一陣の風がなでた。同時に、何かの機械が動く音も。

ぱしゃり、ぱしゃり、ぱしゃり。

「おい」

パシャパシャパシャパシャパシャ

「おい。さっきから何をとってる、その天狗」

「あやや？ 気付いておられましたか……」

上を見てみれば、寺子屋の梁に乗っかっている、少女が一人。

歯の高い一本下駄をはき、ワイシャツにミニスカート、紅葉のプリントがなされたそれは一本下駄を含め山伏の様な格好に見える。その背には黒い翼を生やし、手には幻想郷では珍しい一眼レフの大きなカメラ。外の世界でも、やや奇抜なファッションとして見れなくはないだろうが、彼女もれっきとした妖怪——鴉天狗だ。

ひらり、と重力を無視した柔らかさで土間に降り立ち、そのついで

と言わんばかりにもう一枚写真を撮る。

天狗は幻想郷において唯一現像技術を持ち合わせており、個々でそれぞれに新聞を発行している。彼女もその例に漏れない。自身の名である射命丸 文から取った文々。新聞という新聞を発行している。

もつとも、博麗 霊夢からは単なる火種。人里の人間からは面白いゴシップ新聞程度の認識しかないが。それでも一部には熱心な購読者が存在しているとかいないとか。

そして、毎度毎度幻想郷最速の称号を無駄遣いして盗撮まがいの取材を行っては弾幕で追い払われたりしているとかしていないとか。少なくとも、自分から会いに行きたい類の妖怪ではないことは間違いない。

「でやがったな、この捏造新聞記者」

「何を言います！ 私の取材と新聞は清廉潔白がモットーですよ！」

とても素晴らしい笑顔で、とても素晴らしい嘘を吐いてくれやがりました。どう好意的に解釈しようと、清廉潔白〃偽造捏造という公式がこの鴉天狗にはある。

本人は絶対に認めようとしませんが。

「何処の口が言うんだ、何処の口が」

「この口ですが？」

何の悪びれもなくそう言つてのけるあたり、実はものすごい奴なのかもしれない。言意味はほとんどなくて、悪い意味のみではあるが。

「時々、お前が凄い奴に感じる」

「いやあ、それほどでもありませんよ」

「褒めてない！」

全く効かないであろう怒鳴りの中、それでも助かった気持の方が強い。子供の相手は想像以上に疲れる。決して仲がいいとは言わないが、それでも人間を相手にするよりは気が楽だ。話している最中もほっぺを叩かれたり、背中に乗っかられたりするが、この際無視する。

「お前のことだ。用事は外来人のアイツだろ」

「半分は、そうですね。まだいるかとも思ひましてこちらに寄ったんですが……聞くところによると博麗神社に向かったとか？」

「そうだよ。それにしても時間が掛ってるから……寄り道でもしてるんじゃないくあ！？」

思いっきり頬を引っ張られたので、とりあえず犯人の少年にげんこつを落とす。

痛みのにたうちまわる子供を無視して、伸びた頬をさすって痛みを誤魔化す。

「ふむ……」

その言葉を聞いて、僅かに悩むようなそぶりを見せた後、胸元に手をつ込む。流石の妹紅も面を喰らい、子供の前と言うことで止めようとしたが、直後、眼に入った一枚の写真に全ての言葉を失った。写真の一面を覆い尽くす緑と竹林、差し込む太陽の光に照らされた――腹の出た、二足歩行の河童の石像。まるで、動きだす直前を封じ込めた芸術作品のような、生きているかのような力を感じさせる、素晴らしいが、不気味な石像。

どんな芸術家でも、これを見せられれば製作者に嫉妬を覚えるであろう出来栄でありながら、見事すぎるがゆえに、自然に作られるはずがないもの。

「私、大天狗様から命令を受けてたのよ。何か変な流れが在るから調べろって。で、それを調べてたらこれにあたったの。知ってるわね？」

「……昨日、その外来人と、輝夜と一緒に倒した妖怪よ。その場では確実に消えたはずなのに」

そう。あの時、確かに確認した。とどめを刺したのは守人だが――あの場にいた全員が、その消滅を確認している。それから遅れてこんな趣味の悪い石像が出来たのか。

作ったやつがいるのか、造られたのか、あるいは、そうなるようになっていたのか。

いずれにしても、最悪の趣向であることには間違いないだろう。

まさか、とは思っが、こうなることを知っていて倒したというのだろうか。

「……」

考えたくはない。慧音も心を開いているようだし、自身としても、彼に悪い感情を持っているわけではない。子供たちに向けた楽しそうな表情は偽りではないと思うし、なにより——あの河童に向けた敵意は本物だった。

「心当たりが？」

訪ねてくる文の表情には、いつものようなおどけた色がない。大天狗の命令と言っていたことも嘘ではないようだし、どうやら、本気のようなのだ。

「いや。その外来人——守人が戻ったら聞いてみるしかないんじゃないか？ あって一日二日しか経ってないんだ。交わした会話の量だつてたかが知れてる」

「ふむ、まあ、そんなところですかね。私としても、当人がいないのに有益な情報が入るとは思っていませんでしたし。まあ、ついとして……出会いはどんな出会いだったんですか？！」

「結局そこか！！」

思いっきり突っ込んだところで、ついに子供たちの忍耐が限界を超えた。

「なー、あそぼーぜもこー！！」

「きゃあー!?」

袖を思いっきり引つ張られて、バランスを崩しつんのめりながら転がり出る。

子供たちにとっては、小難しい話はどうでもいいのだ。しかも、幸いと言うべきか、いつも口うるさく日ごろの行動を注意してくる慧音がいないので、のびのびと遊べることの方が重要なのだ。

「あやや……」

面白がって助けようとしない文にうらみがましい視線を送りながら、子供たち数人に引きずられて里の通りに出る。

子供たちの手に有るのは、直径20センチ程の丸い玉。弾ではない。そつえば、最近はさつかーなるものが流行っているとか聞いたことがある。期待が百万ボルトは込められた瞳を見る限り、どうやら一緒に遊ばなければ返してもらえないらしい。

「はあ、わかった。慧音が返ってくるまでなら付き合ってやる」

その言葉尻は、結局子供たちの歓声に飲み込まれて宙に消えてしまっていた。

「とあつー!」

どこぞの低空ドロップキックのように、両足でボールを狙うべくかつ跳ぶ少年が一人。

「ほれ」

しかしかわされてしまった!!

「ああ!? くっそー、なんでそんな動きができるんだよ」

「それでも元名家の出だ。蹴鞠は得意だからな」

右足でボールを固定したまま若干胸を張る。得意だったといつても数百年も前の話ではあるが、それでも身体にしみついた動きは抜けていなかったらしい。

もつとも、厳密に言えば蹴鞠とサッカーは全く違う。脚を使うというのは同じではあるのだが……子供たちが妹紅からボールを奪えないのは彼女自身の運動能力が優れているだけであつたりする。

サッカーと言うよりはボールを取り合う遊びになっているが、細かいことはどうでもいいのか、再び子供たちが妹紅のボールを狙って殺到する。

それを軽快な身のこなしでかわし続け——しかし、それでも諦めない子供たちの動きに徐々に追い詰められていく。

「と、はっ!」

風が吹く。楽しげに踊るその世界を揺らすように。

「てやつ!」

悪意は集いて刃となり。

「そこだっ!!」

輝きは陰り、闇と成る。

「つと!？」

諦めなかった一人の足が、妹紅が操るボールを僅かに捉える。

油断していた——というよりは、取れるように誘導したのだが——

思いのほか勢いがついていたためにボールは大きく弾かれ、地面を転がっていく。

風に流されるままに転がるボールを追いかけて、やがてそれは道の真ん中に立つ人物の足に当たって止まり、自然とそちらに視線が向かう。

裾がぼろぼろになり、赤黒い汚れの付着した襟の高い茶コート。幻想郷ではまず見ることはないその服装は明らか程に外来人のもの。ひよろりと高い上背と——首元の、イタチを模したマフラー。そして、顔面を、まるで拘束するかのように釘で固定された檻。だらりと下げられた腕、袖口から除くのは掌ではなく——命を狩るための鎌が二振り。

しかし、気付かない。その眼に映るのは自信を待つ一つの球。警告を発することもなく、望むのは、ただ自身を追う人の影。それに応える為にただ駆ける童は知らず。その背を押す死神の息吹を。

コマおとしのように。世界が動くことを拒んでいるかのように。全ての時間がその刹那を引き延ばそうとするかのように。

その悪意は、世界のすべてを否定するために。

ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。

絶死の刃がその軌道を円に描く。

振り下され、悲鳴が青の空へと昇る。

瞬く程の時間すら死に絶える。その世界の果てに——紅の華が咲き乱れる。

紅い 赤い 朱い 罪科の華が。

幕間乃四 迫る天狗と蓬萊人（後書き）

文「はいはい！！ 毎度おなじみ貴方の心に清涼剤！！ 常に清く正しく射命丸です！！ 今回は、私と……」

はい、どうも。作者の茨陸號です。すみません。土下座します。謝ります。お望みとあらばこの心臓を差し出しても……ッ！！

文「では、取材を。えー、一週間に一度の投稿とほざいておきながら、二週間どころか、三週間もあいた理由は？」

ちよ、マイクをぐりぐりと押し付けないで……いた、いたい！！

文「携帯ゲームの遊王^{ビト}にどっぷりとハマっていたというのは本当なんでしょうか？」

あ、えー、それは、その

文「とつととほざいてください。ついでに私の出番ももっと増やしてください」

ひ、酷い脅迫を見た！！

あ、えー、と、とりあえず。理由としては二つほど。

まあ、一つは遊戲。のせいです。すみません。

もう一つは、単純に執筆時間が減ったことですかね。新しいアルバイトが決まって、それがちょうど更新をしようとしていた時期と重なった……というわけで。

文「にしても開けすぎでは？」

無理に更新してもよかったんだけど、中途半端に更新するよりは、ある程度のストックを作ってから……と。

文「ふむ。で、今のところのストックは」

……話分

文「は？ 聞こえませんか。もう一度」

……ち話分

文「……わんもあ」

一話分でえつす！！ てへ♪

文「竜巻『天孫降臨の道標』！！」

な、なんだ、急に風が集まって……！？
ぐ、ぐあああああああ……？

文「悪は滅びました。ふう……あ、次の話からの話はバトルシーンを多めに盛り付けていくようですよ。私の活躍シーンもデカ盛りもりもり盛り沢山！！ さて、気になるのはあの外来人……次の話では、どうやら一人で戦う様子……おっと、これ以上は、ぜひ、文々。新聞を定期購読してください。契約して下さる方を常に絶賛募集中です。では！！」

つ、次の話は、が、がんばって一週間以内に、お届け、したい、と思います。ぐふう。

見てくださっている方は、ぜひ身捨てずにお待ちください……おねがいしま……ぐは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0194w/>

東方鴉守伝

2011年11月15日07時06分発行